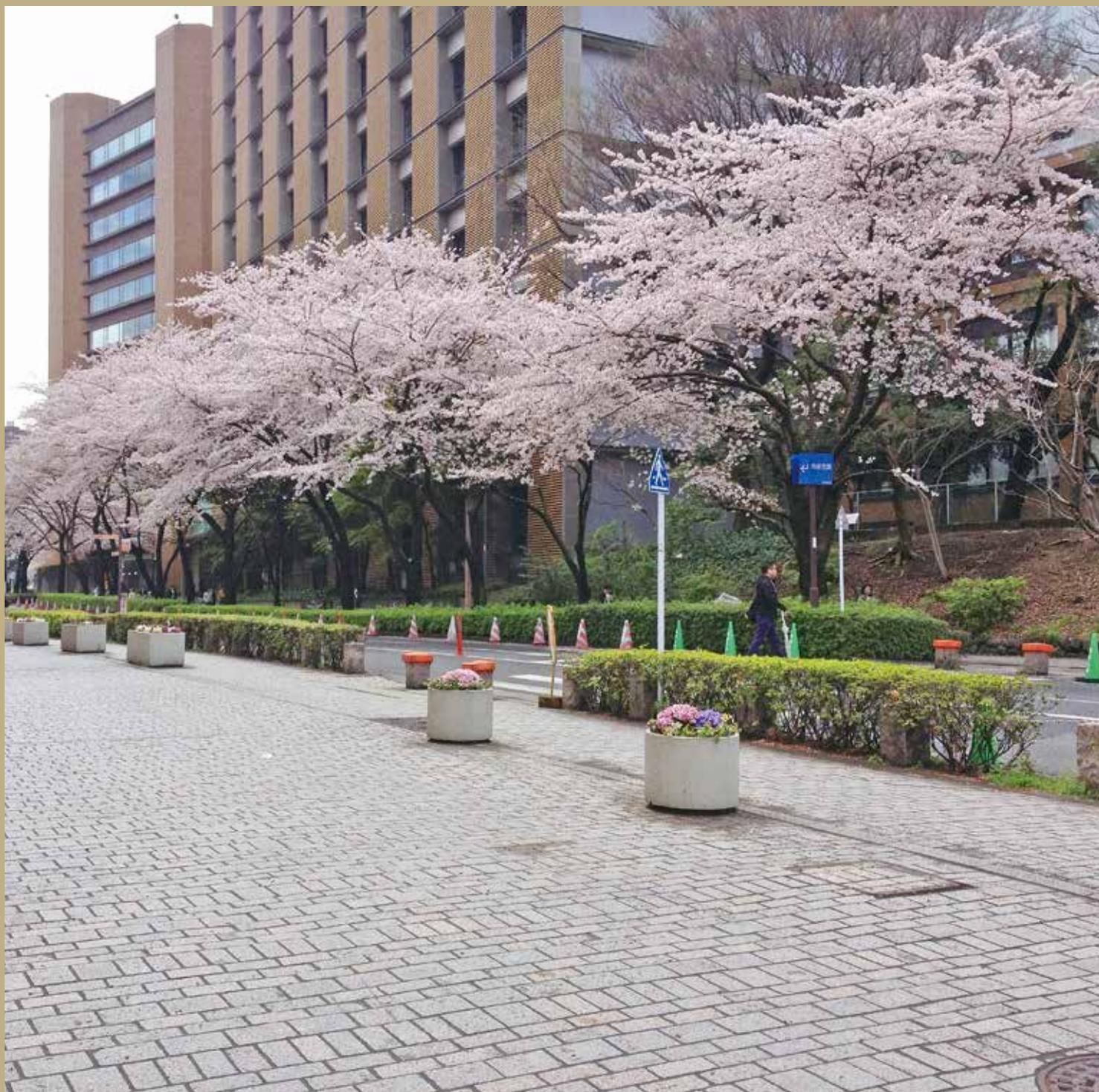


学内広報

2017.3.17

no.1493



特別号

2015年度大学教育の達成度調査

東京大学の教育

～「大学教育の達成度調査」からみえてくるもの

大学総合教育研究センター

はじめに

大学総合教育研究センターでは、卒業生に対する大学教育の達成度に関する調査を実施している。今年度は第8回目にあたり、2016年3月に2015年度の卒業生3,037名を対象として実施し、2,427名から回答をいただき、回収率は79.9%であった。調査の実施には各学部にも多大な協力をいただいた。調査にご協力をいただいた各学部と学生みなさんに御礼を申し上げる。また、関係者の皆様にも御礼を申し上げたい。

この調査は、東京大学の教育・研究環境の向上を目的として、学生に東京大学の学習環境、学習経験や大学生活についてたずねるものである。調査結果は、大学総合教育研究センターで分析し、その結果を東京大学の自己評価さらに教育研究の改善にさまざまな形で活用している。先にも述べたように、本調査は、本年度で8回を数えた。このため、本報告書では、過去8回の調査で回答の傾向が変化している質問項目について、その推移を検証した。今後よりいっそうの分析を続け報告していく予定である。

今回は8回目の試みであり、回収率は上昇しているものの、依然として学部によってかなりのばらつきがあり、全体の傾向としてみるためには留意が必要である。今後も、調査を改善し、来年度以降も実施していくことになっている。本報告書に関して、忌憚のないご意見をいただければ幸いである。また、引き続き各学部と今年度卒業される学生みなさんの調査へのご協力をお願いしたい。

2017年2月
大学総合教育研究センター長
須藤 修

調査実施方法

- アンケート配布日 : 2016年3月25日(卒業式)
- 2016年3月卒業生数 : 3,037名
- 有効回収数 : 2,427票
- 回収率 : 79.9% (回収率は、有効回収数 / 卒業生数 で計算した)

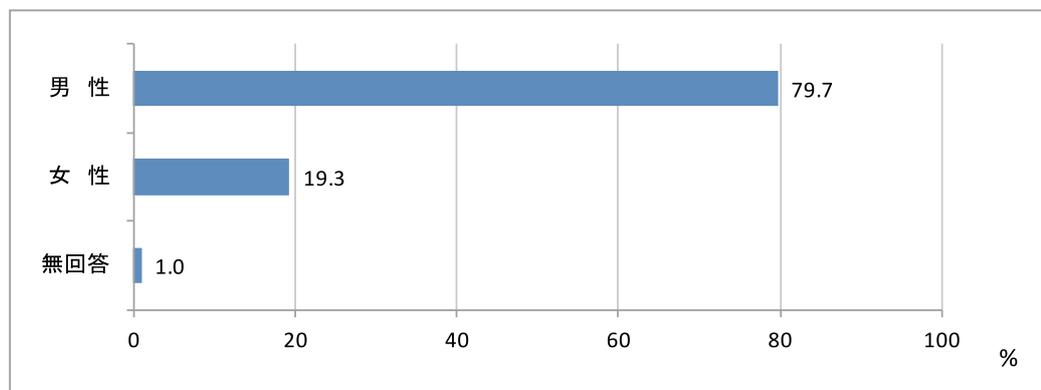
※学部(各学科)が、卒業式後の書類配布時に調査票を配布、回収した。

※グラフの個々の数字は、小数点以下を四捨五入しているため、数字を合計して100%にならない場合がある。

回答者の特性

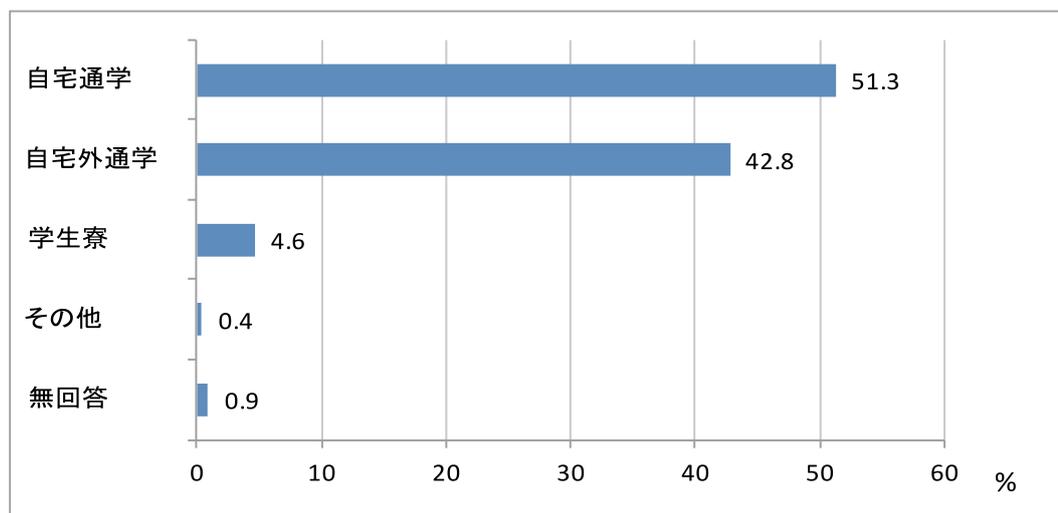
Q 5 性別

回答者は男性が8割（79.7%）、女性が2割（19.3%）、無回答（1.0%）となっている。



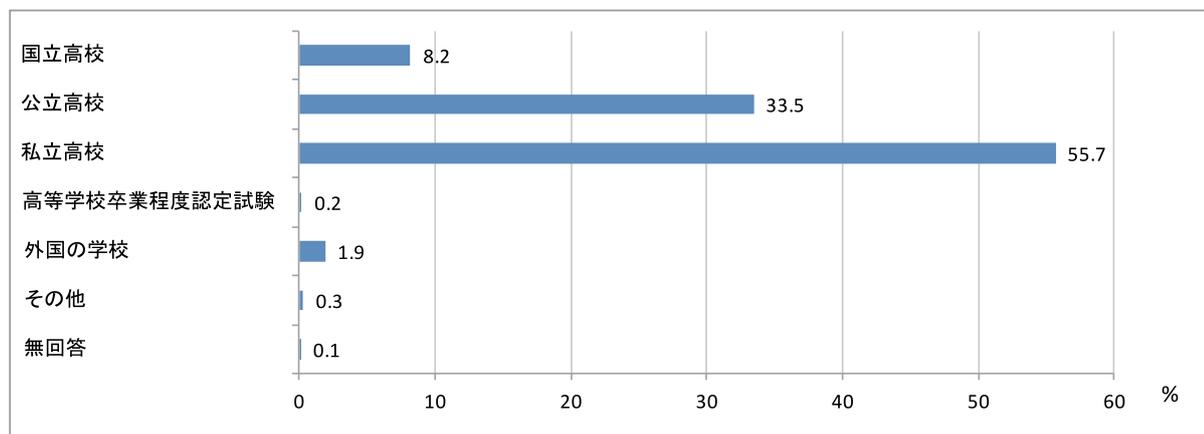
Q 6 通学

回答者のうち、自宅通学はおよそ半数の51.3%、自宅外通学は42.8%で、学生寮は4.6%と少ない。



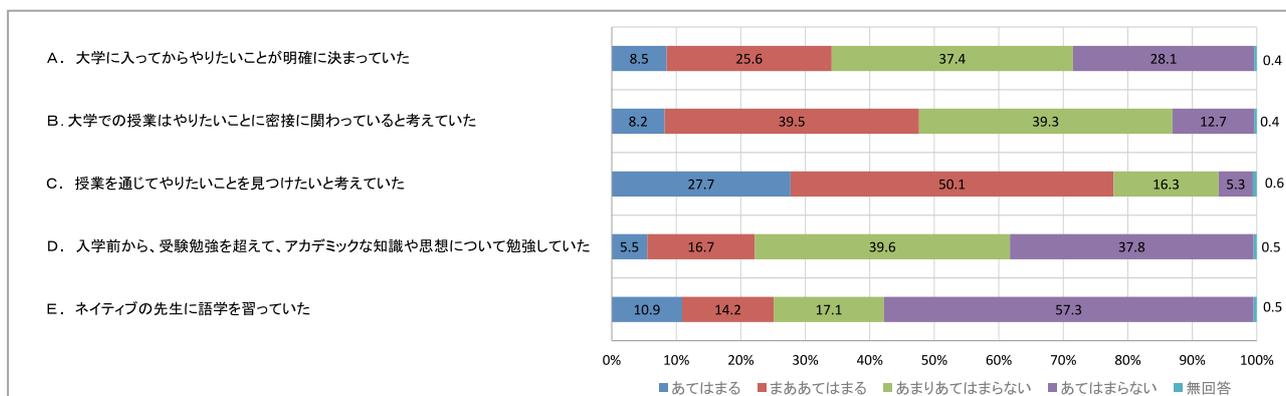
Q 7 出身高校等

回答者のうち、過半数（55.7%）は私立高校出身で、次いで公立高校が3分の1（33.5%）、国立高校が1割弱（8.2%）となっている。また、外国の学校は1.9%となっている。



入学時：「やりたいことが明確」は約3分の1、「授業を通じて見つけたい」は約4分の3

Q 8 入学時の様子についてお聞きします。次のことは、どの程度あてはまりますか。

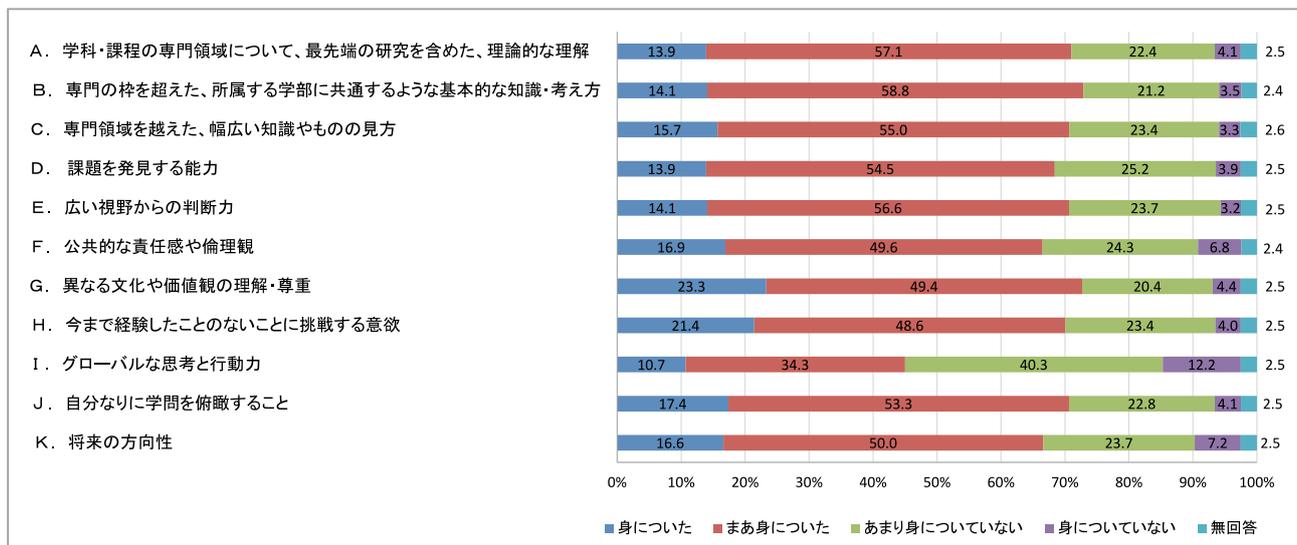


「A. 大学に入ってからやりたいことが明確に決まっていた」（「あてはまる」8.5%と「まああてはまる」25.6%を合わせて34.1%、以下同じ）や「B. 大学での授業はやりたいことに密接に関わっていると考えていた」者（47.7%）はいずれも半数以下で、「C. 授業を通じてやりたいことを見つげたいと考えていた」者が約4分の3（77.8%）と、入学時には、東京大学の教育の特徴である late specialization に沿った学習志向性を持っていた。これに対して、「D. 入学前から、受験勉強を超えて、アカデミックな知識や思想について勉強していた」（22.2%）や「E. ネイティブの先生に語学を習っていた」（25.1%）と、入学以前に受験以外の学習をしていた者は、4、5人に1人いる程度である。

「A. 大学に入ってからやりたいことが明確に決まっていた」者の割合は、2008年度は「あてはまる」10.0%、「まああてはまる」30.5%で合わせて40.5%であったが、やや減少傾向にあり、2015年度は34.1%となっている（時系列の傾向については31頁）。同じように、「D. 入学前から、受験勉強を超えて、アカデミックな知識や思想について勉強していた」者の割合は、2008年度は「あてはまる」6.3%、「まああてはまる」19.4%で合わせて25.7%であったが、やや減少傾向にあり、2015年度は22.2%に減少している。こうした時系列の変化については、後に詳細に検討する。その他の項目について、こうした時系列の変化に傾向性がない。以下では、とくに目立った傾向がないものについては、特に記載しない。

身につけた能力：「学部に通ずる基本的な知識・考え方」、「最先端の理論的理解」、「幅広い知識やものの見方」、「学問を俯瞰すること」、「異なる文化や価値観の理解・尊重」、「広い視野からの判断力」、「今まで経験したことのないことに挑戦する意欲」を身につけた者は7割前後、「グローバルな思考と行動力」は4割半

Q 9 あなたは、東京大学の教育を通じて、以下のような点を身につけたと思いますか。

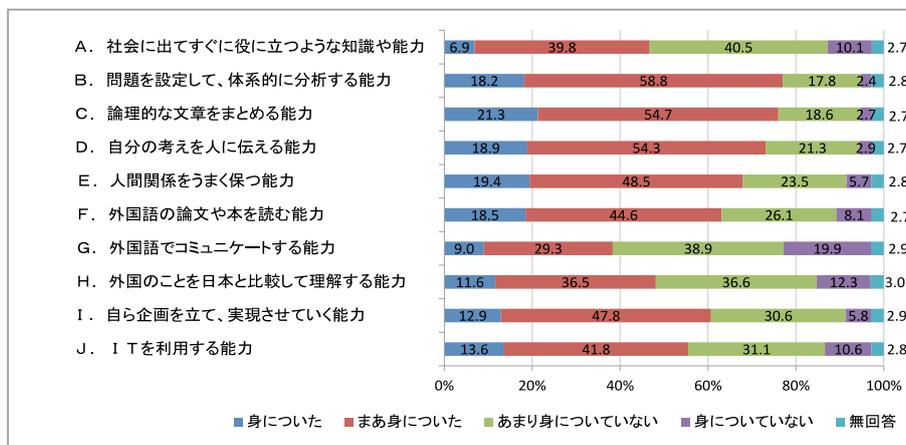


東京大学の教育を通じて身につけた能力では、「B. 専門の枠を超えた、所属する学部に通ずるような基本的な知識・考え方」(「身についた」14.1%と「まあ身についた」58.8%で合わせて72.9%、以下同じ)、「A. 学科・課程の専門領域について、最先端の研究を含めた、理論的な理解」(71.0%)、「C. 専門領域を越えた、幅広い知識やものの見方」(70.7%)、「J. 自分なりに学問を俯瞰すること」(70.7%)を身につけた者は7割を上回る。これらは毎年度ほとんど変化していない。

2013年度より学部教育の総合的改革の中で育成する能力・人材に関わる、次のような項目をたずねている。以下、2015年度について「身についた」とする者の高い割合を見ると、「G. 異なる文化や価値観の理解・尊重」(「身についた」23.3%と「まあ身についた」49.4%を合わせて72.7%)、「E. 広い視野からの判断力」(「身についた」14.1%と「まあ身についた」56.6%を合わせて70.7%)、「H. 今まで経験したことのないことに挑戦する意欲」(「身についた」21.4%と「まあ身についた」48.6%を合わせて70.0%)は7割以上である。次いで、「D. 課題を発見する能力」(「身についた」13.9%と「まあ身についた」54.5%を合わせて68.4%)と「F. 公共的な責任感や倫理観」(「身についた」16.9%と「まあ身についた」49.6%を合わせて66.5%)は3分の2となっている。これに対して、「I. グローバルな思考と行動力」(「身についた」10.7%と「まあ身についた」34.3%を合わせて45.0%と身についたとする者は半数以下となっている。

「外国語の論文や本を読む能力」が身についた者は6割以上、「外国のことを日本と比較して理解する能力」は約半数、「外国語でコミュニケーションする能力」が身についた者は4割弱

Q10 あなたは、大学時代を通じて、以下のような点を身につけたと思いますか。



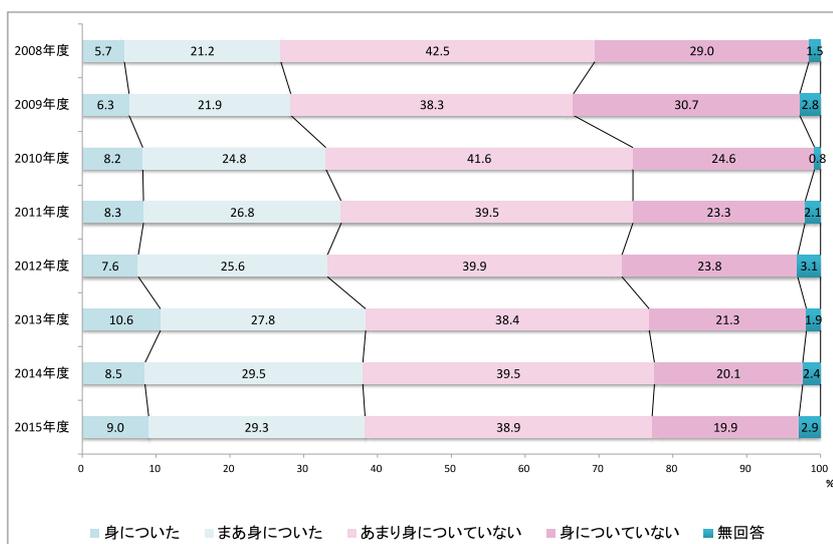
学生が大学時代を通じて身についたとしているのは、「B. 問題を設定して、体系的に分析する能力」（「身についた」と「まあ身についた」を合わせて77.0%、以下同じ）、「C. 論理的な文章をまとめる能力」（76.0%）、「D. 自分の考えを人に伝える能力」（73.2%）、「E. 人間関係をう

まく保つ能力」（67.9%）といった汎用性の高い一般的な能力である。

これに対して、「A. 社会に出てすぐに役に立つような知識や能力」が身についたとしている者は半数以下（46.7%）に過ぎない。他方、「F. 外国語の論文や本を読む能力」は6割以上（63.1%）の者が身についたとしているのに対して、「H. 外国のことを日本と比較して理解する能力」は約半数（48.1%）、「G. 外国語でコミュニケーションする能力」が身についた者は4割弱（38.3%）に過ぎない。

「外国語でコミュニケーションする能力」が身についた者は少しずつ増加しているが、ここ3年は安定傾向

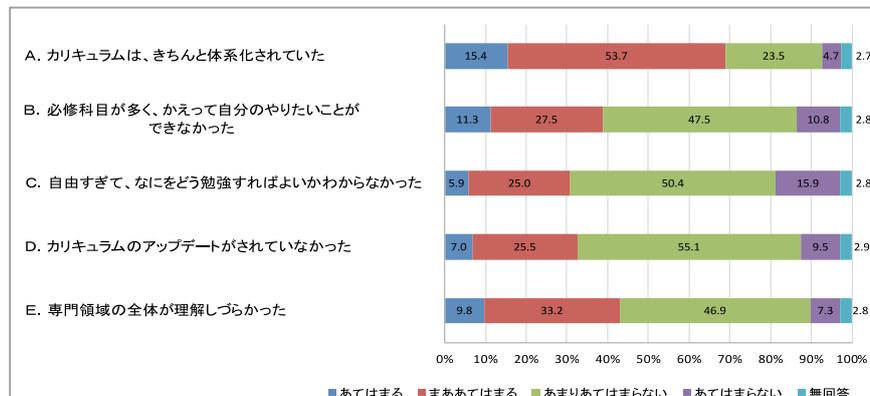
「Q10G. 外国語でコミュニケーションする能力」の推移



「G. 外国語でコミュニケーションする能力」については、年度によって増減はあるものの、わずかではあるが、身についたと答えた者の割合が年々高くなってきていた。とくに「身についた」者のみの割合は2008年度の5.7%から2013年度の10.6%へと、約2倍に増加している。その後は、2014年度は8.5%、2015年度は9.0%と、わずかな増減をしているものの、安定した傾向を示している（25頁）。

カリキュラムについては肯定的な回答が約7割だが、「専門領域の全体が理解しづらかった」と「必修科目が多く、かえて自分のやりたいことができなかった」という者は約4割

Q11 東京大学の専門学部・学科等のカリキュラムについてお聞きします。



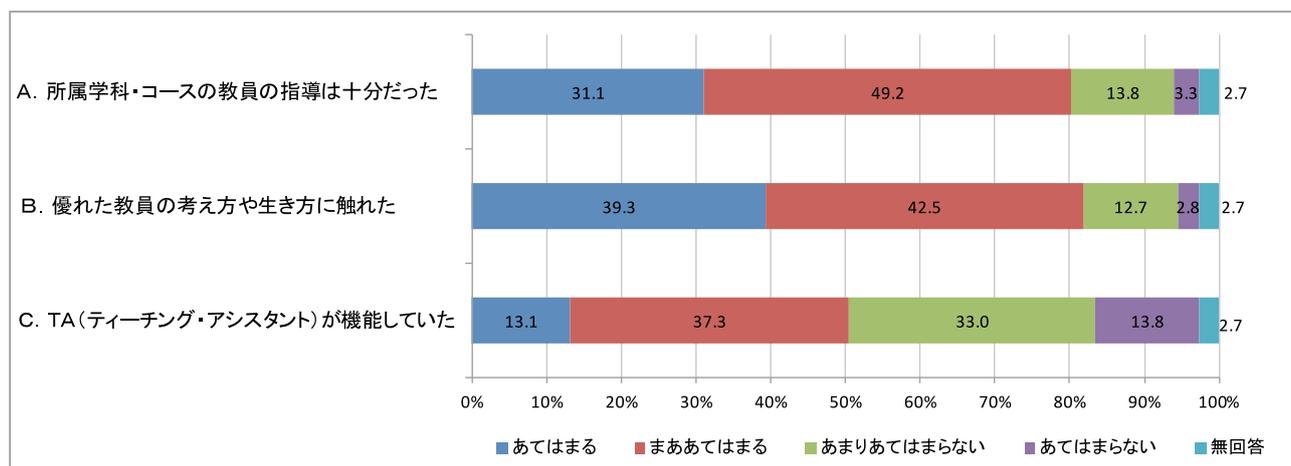
カリキュラムについては、「A. カリキュラムは、きちんと体系化されていた」とする者が、69.1%（「あてはまる」と「まああてはまる」を合わせた回答、以下同じ）と約7割となっている。他方、否定的な項目については、「E. 専門領域の全体が理解しづらかった」（43.0%）と

「B. 必修科目が多く、かえて自分のやりたいことができなかった」（38.8%）は約4割、「D. カリキュラムのアップデートがされていなかった」（32.5%）と「C. 自由すぎて、なにをどう勉強すればよいかわからなかった」（30.9%）は約3割、とそれぞれ約4割と約3割となっている。

とくに、「B. 必修科目が多く、かえて自分のやりたいことができなかった」者の割合は年々増加傾向にあり、2008年度の30.6%から2015年度は38.8%となっている（31頁）。

8割の者が「教員の指導は十分」、「優れた教員の考え方・生き方に触れた」

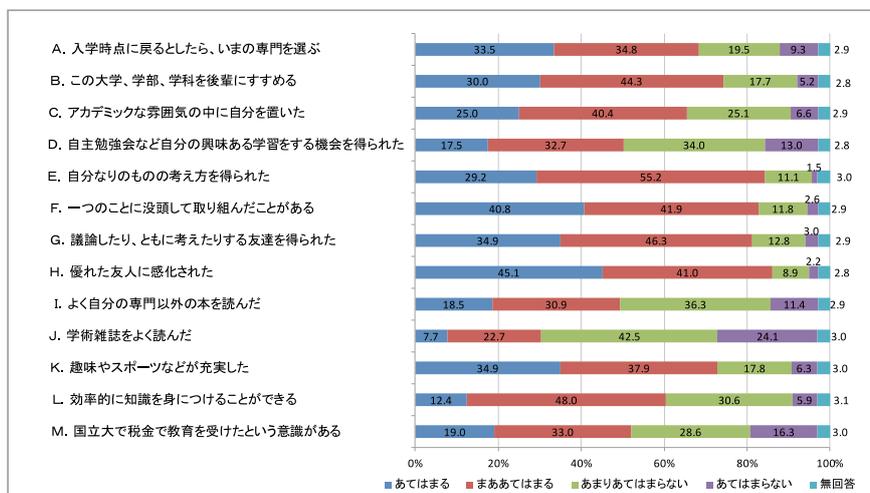
Q12 教員や教育制度との関係についてお聞きします。



「B. 優れた教員の考え方や生き方に触れた」（81.8%、「あてはまる」と「まああてはまる」を合わせた回答、以下同じ）「A. 所属学科・コースの教員の指導は十分だった」（80.3%）が8割となっている。反面、「C. TA(ティーチング・アシスタント)が機能していた」と評価するのは50.4%と、半数になっている。「C.TAが機能していた」を2008年度は43.9%であったが、2015年度は50.4%まで増加している（29頁）。

「友人から感化」は約8割半、「自分なりのものの考え方の習得」、「一つのことに没頭」、「議論する友人を得られた」は約8割

Q13 大学時代を通じての経験を総合して、次のようなことはどの程度あてはまりますか。

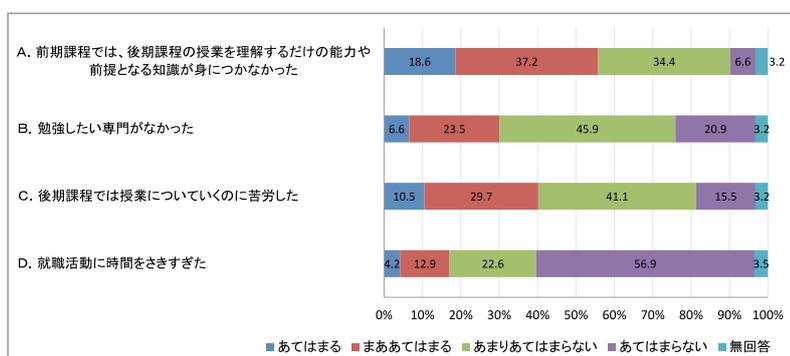


大学時代の経験として最も高く評価されているのは、「H. 優れた友人に感化された」（2014年までは「優れた友人に感心したり感化されたりした」）（「あてはまる」45.1%と「まああてはまる」41.0%で合わせて86.1%、以下同じ）、「E. 自分なりのものの考え方を得られた」（84.4%）、「F. 一つのことに没頭して取り組んだことがある」（82.7%）、「G. 議論したり、とも

に考えたりする友達を得られた」（81.2%）（2014年度までは「議論したり考えたりする友人が得られた」）で、8割を超えている。これに対して、「B. この大学、学部、学科を後輩にすすめる」（74.3%）と「A. 入学時点に戻るとしたら、いまの専門を選ぶ」（68.3%）はやや低くなっている。また、「I. よく自分の専門以外の本を読んだ」（49.4%）は約半数、「J. 学術雑誌をよく読んだ」（30.4%）は3割で、いずれも減少傾向にある（32頁）。特に2014年度まで「J. 社会評論や思想/自然科学の雑誌を読んだ」は、2015年度から「J. 学術雑誌をよく読んだ」に変更したこともあり、従来の約4割から3割（30.4%）に減少している。他方、「M. 国立大で税金で教育を受けたという意識がある」（52.0%）という者も約半数になっている。とくに、「E. 自分なりのものの考え方を得られた」、「G. 議論したり、ともに考えたりする友達を得られた」、「H. 優れた友人に感化された」は、年々わずかではあるが減少傾向にある（33, 34頁）。

「前期課程では、後期課程の授業を理解するだけの能力や前提となる知識が身につけなかった」は約半数

Q14 あなたは、大学時代に次のような経験がありましたか。

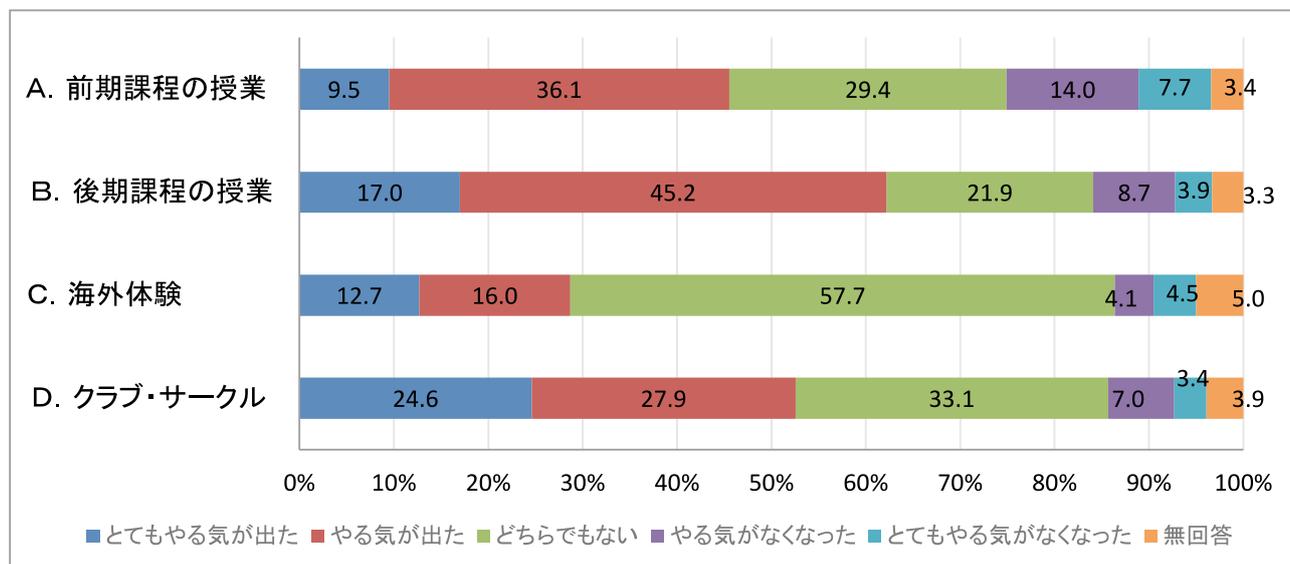


大学時代の否定的な経験としてあげられたのは、「A. 前期課程では、後期課程の授業を理解するだけの能力や前提となる知識が身につけなかった」（「あてはまる」18.6%と「まああてはまる」37.2%で合わせて55.8%、以下同じ）で、約半数があてはまるとしている。この質問は、2014年度までは、

「専門課程を修得するだけの能力や前提となる知識を欠いていた」で、2014年度では、57.6%と2015年度とほぼ同じ割合となっている。「B. 勉強したい専門がなかった」者（30.1%）の割合は2014年度（22.2%）と比べ、約8%増加しており、「C. 後期課程では授業についていくのに苦労した」（40.2%）の割合も2014年度（35.5%）と比べ、約5%増加している。「D. 就職活動に時間をさきすぎた」（17.1%）についても、2014年度（14.5%）を上回っている。

勉強のやる気が出たきっかけ 前期課程の授業：4割半、後期課程の授業：約6割、クラブ・サークル：約半数、海外体験：約3割

Q15 大学生活の中で何かがきっかけになって、勉強のやる気が出たり、なくなったことがありますか。



今年度より、「大学の途中でやる気が削がれてしまった」という質問にかえて、「大学生活の中で何かがきっかけになって、勉強のやる気が出たり、なくなったことがありますか」と、「A. 前期課程の授業」、「B. 後期課程の授業」、「C. 海外体験」、「D. クラブ・サークル」について、それぞれ「とてもやる気がなくなった」と「やる気がなくなった」と従来の否定的な評価だけでなく、「とてもやる気が出た」と「やる気が出た」という肯定的な評価も、たずねた。「A. 前期課程の授業」について、「とてもやる気が出た」と「やる気が出た」は合わせて4割半（45.6%、以下同様）であるのに対して、「B. 後期課程の授業」の割合は62.2%と6割を超えている。次いで、「D. クラブ・サークル」の割合は52.5%は半数を越えているが、「C. 海外体験」の割合は3割弱（28.7%）と低くなっている。逆に、「とてもやる気がなくなった」と「やる気がなくなった」を合わせてやる気がなくなったのは、「A. 前期課程の授業」で約2割（21.7%）、「B. 後期課程の授業」は1割強（12.6%）、「D. クラブ・サークル」は1割（10.4%）、「C. 海外体験」は1割弱（8.6%）となっている。なお、前年度までの「大学の途中でやる気が削がれてしまった」という者は約半数（49.1%）であった。

やる気が出た、あるいはやる気がなくなったきっかけの様子や原因について、自由記述で回答してもらった。計325人の自由記述から抽出した出現頻度の高いキーワードは、クラブ・サークル（部活動を含む）、後期課程の専門科目・ゼミ、前期課程の授業、海外体験、人間関係と進振りである。これらのキーワードがやる気が出たきっかけになる場合もあれば、やる気がなくなったきっかけになる場合もある。クラブ・サークル（部活動を含む）、後期課程の専門科目・ゼミ、人間関係および海外体験をきっかけに、やる気が出たケースが比較的多い。

クラブ・サークル（部活動を含む）でやる気が出たケースは多く、「サークルは集団活動なので、責任感が生まれた」、「クラブ活動で友達との関わりの中でやる気が出た」、「2年次、運営代となりサークルの代表を務めた。个性的で今までとは違ったコミュニケーションでリーダーシップを発揮する必要があり、精神的に取り組んだ。特に人間関係の維持に力を注いだ」というような記述がある。クラブ・サークル（部活動を含む）でやる気がなくなった人は「部活がきつく、精神的にも疲れていて、勉強する気が出ないこ

とがあった」、「部活動が多忙であったこともあり、後期課程は学問に対して良い取り組みが出来なかった」など、学業とクラブ・サークル活動との両立の大変さを述べる例が見られた。

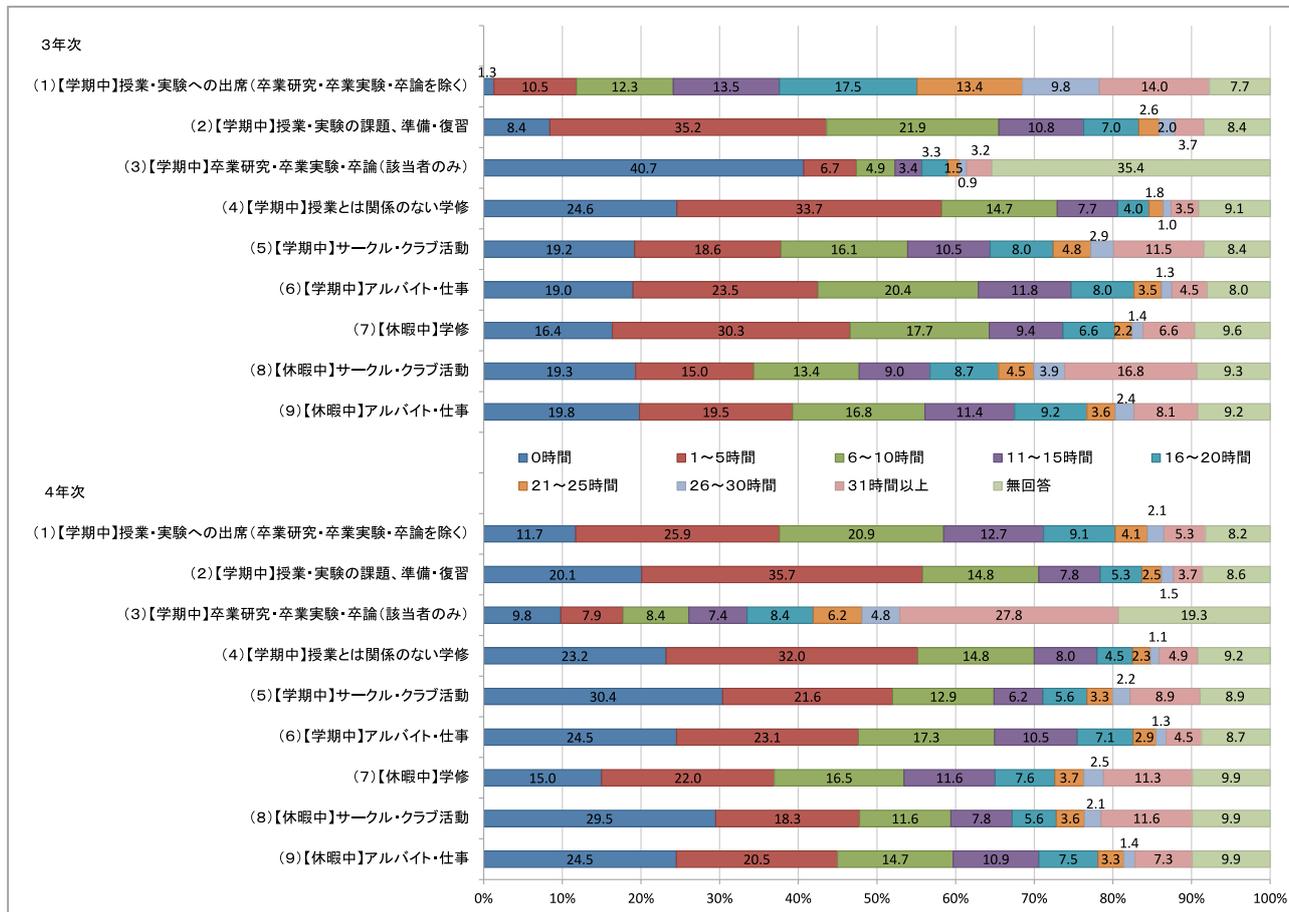
前期課程の授業でやる気が出た事例を挙げると、「あまり望ましい態度とはいえませんが、広く浅く学ぶことは私にとっても向いていて、前期教養は門外漢でも各分野の教えに触れることが出来たのでとても楽しかった」、「前期課程においては、レポートの途中経過の報告に対し良かった点、改善すべき点をフィードバックしてもらえた」などがある。やる気がなくなった自由記述としては、「前期課程は、目的意識を持ちにくい」、「前期課程では今の専門とはあまり関係のない必修の授業が多く、興味があまりもてなくてやる気が出づかった」などがある。

後期課程の専門科目・ゼミについて、やる気が出たケースでは「後期は、自分が入学当初から学びたかった授業が増え、やる気が出た」、「後期の演習を経験して、講義などで幅広く考え方を学ぶ意欲が湧いた」、「後期課程はあまり触れてこなかったことなので、新鮮で楽しかった」というような記述が見られる。「自分の前提知識不足もあり、後期の授業の多くがあまり面白いと感じることが出なかった」、「前期で高校に引き続き受動的であったカリキュラムが、後期で急に自由になった時にやる気がなくなることがあった」といった理由で、後期の授業でやる気がなくなったケースもある。

海外体験について、「海外旅行をすることで、外国語の大切さが痛感された」、「海外で日本語のティーチングボランティアをしたのがとても刺激になった」、「奨学金をいただいて短期海外留学に挑戦した。得るものもなく帰ることは出来ないという思いから、様々なことに挑戦し、また周囲の方々の助けもあって、非常に充実した生活を送ることが出来たと思う」、「海外（米国）大手製薬企業の研究所でインターンを行ったことは特に思い出深い。より広い視点から医薬・ヘルスケアのあり方を考えるきっかけとなった」というような、やる気が出たケースが多い。これに対して「留学のシステムが分かりづらいと感じた」ため、やる気がなくなったという記述もある。海外体験は前期課程の授業や後期課程の授業のように全員が経験をもつわけではない。やる気にかかわる分析をする際、関係者に絞って考察する必要がある。また、自由回答は全体の傾向を必ずしもあらわしているわけではないことにも、十分留意する必要がある。

3年次：「授業・実験の課題、準備・復習」「10時間以下」が約3分の2 4年次：「授業・実験の課題、準備・復習」「10時間以下」が7割、「卒業研究・卒業実験・卒論」は「31時間以上」が4分の1

Q16 典型的な1週間（土、日を含む）の平均的な生活時間を、学期中と休暇中について伺います。生活時間は1日24時間として、1週間の合計が168時間となるように、3年次と4年次について、(1)から(9)までそれぞれ1～8のどれか1つに○をつけてください。



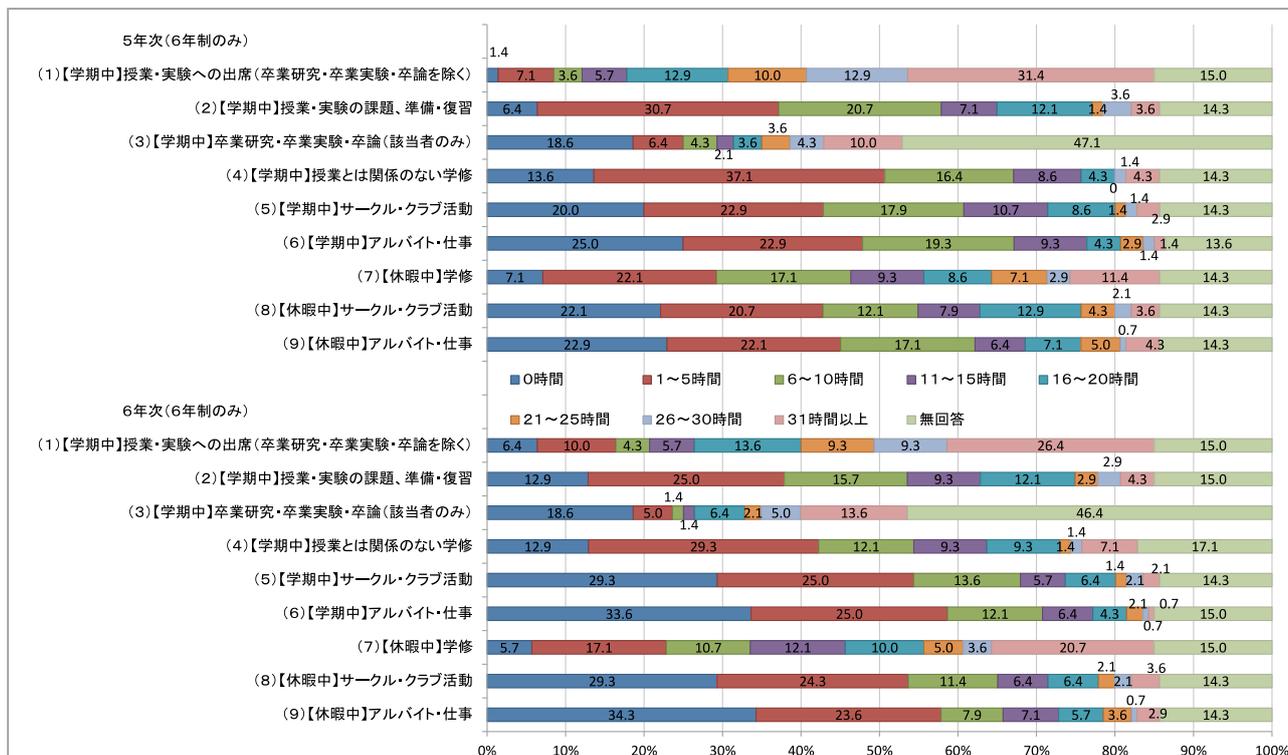
生活時間については、典型的な1週間（土日を含む）の時間数を学期中と休暇中についてそれぞれ3年次と4年次についてたずねた。3年次には「(2) 授業・実験の課題、準備・復習」は「10時間以下」が約3分の2（65.5%）であるが、4年次では「10時間以下」が7割（70.6%）となっている。「(3) 卒業研究・卒業実験・卒論」は4年次では「31時間以上」が4分の1（27.8%）と最も高い割合を占めている。また、「(4) 授業とは関係のない学修」について、「0時間」は3年次では24.6%、4年次でも23.2%となっており、どの学年の割合も2014年度よりやや高い。

6年制課程

5年次：「授業・実験の課題、準備・復習」は「10時間以下」が6割弱

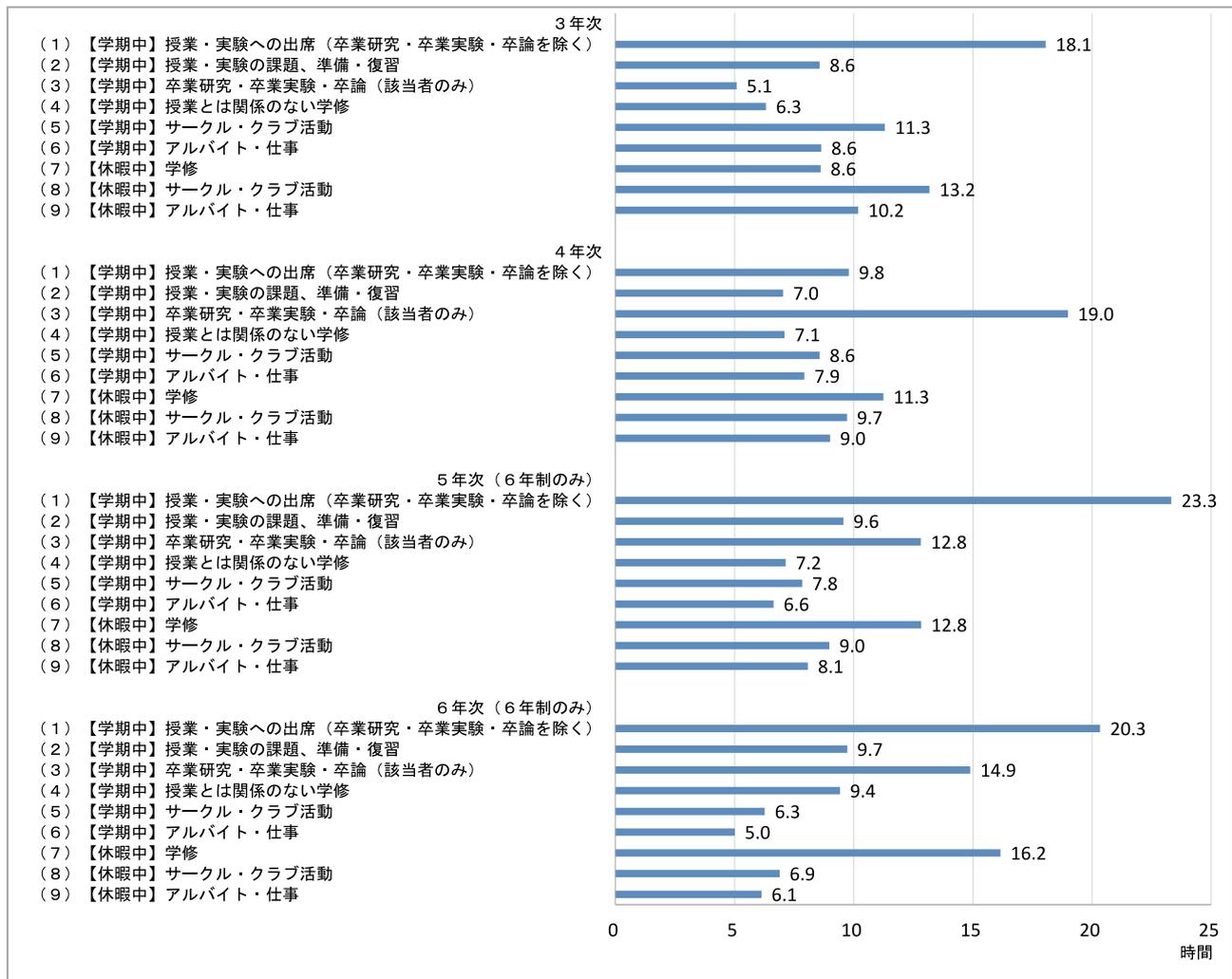
6年次：「授業・実験の課題、準備・復習」は「10時間以下」が半数以上

Q16 典型的な1週間(土、日を含む)の平均的な生活時間を、学期中と休暇中について伺います。生活時間は1日24時間として、1週間の合計が168時間となるように、5年次と6年次について、(1)から(9)までそれぞれ1～8のどれか1つに○をつけてください。



6年制課程(医学科、獣医学課程、薬学科)については、5、6年次についてのみたずねた。5年次には「(2) 授業・実験の課題、準備・復習」は「10時間以下」が6割弱(57.8%)だが、「(1) 授業・実験への出席(卒業研究・卒業実験・卒論を除く)」の「31時間以上」も31.4%と、約3分の1になっている。また、「(4) 授業とは関係のない学修」が「0時間」は13.6%となっている。6年次では「(2) 授業・実験の課題、準備・復習」は「10時間以下」が半数以上(53.6%)となっているが、「(1) 授業・実験への出席(卒業研究・卒業実験・卒論を除く)」の「31時間以上」も26.4%と4分の1以上となっている。6年次では、「(3) 卒業研究・卒業実験・卒論」は「31時間以上」が13.6%となり、「0時間」が18.6%と最も高い割合を占めている。また「(4) 授業とは関係のない学修」の「0時間」も12.9%となっている。

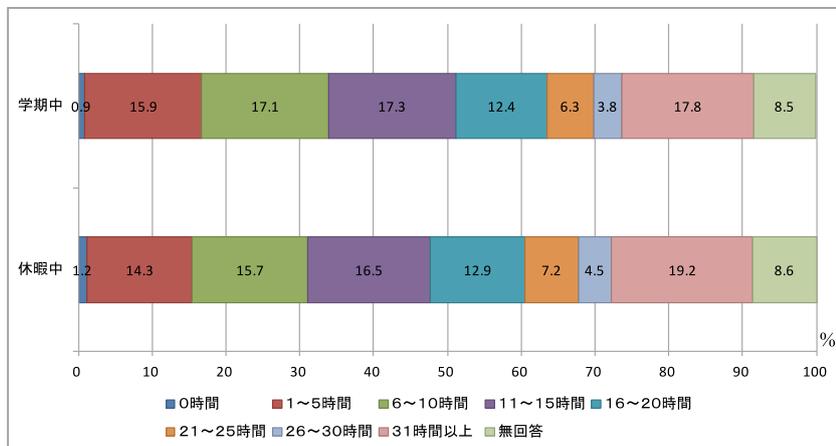
3年次 : 「授業」 18 時間、「予習復習」 9 時間、「卒研卒論」 5 時間、「授業外の学習」 6 時間
4年次 : 「授業」 10 時間、「予習復習」 7 時間、「卒研卒論」 19 時間、「授業外の学習」 7 時間



生活時間の回答のそれぞれの中位値 (たとえば、「1 から 5 時間」では 3 時間) を取り、平均を算出した。なお、「31 時間以上」は 31 時間として算出した。このため、やや過小推計になっている。学期中の時間数の平均で見ると、「(1) 授業・実験への出席 (卒業研究・卒業実験・卒論を除く)」は、3 年次で 18.1 時間、4 年次には 9.8 時間となっている。「(2) 授業・実験の課題、準備・復習」は、3 年次で 8.6 時間、4 年次には 7.0 時間となっている。「(3) 卒業研究・卒業実験・卒論 (該当者のみ)」は、3 年次で 5.1 時間、4 年次には 19.0 時間となっている。また、「(4) 授業とは関係のない学修」については、3 年次で 6.3 時間、4 年次で 7.1 時間となっている。いずれの年次も約 1 時間の減少となっている。単純に合計すると、学修時間は、3 年次で 38.1 時間、4 年次で 42.9 時間となっている。6 年制の 5 年次と 6 年次も、4 年制の 3 年次と 4 年次と同じような傾向がみられるが、いずれもやや時間が長くなっている。

インターネットの利用時間は、学期中・休暇中とも5時間以下が約6分の1、26時間以上が約2割、平均は約16時間

Q16-SQ 上記の時間のなかで、PC、タブレット、スマートフォンなど、すべて合わせてインターネット（ウェブ検索、SNSなど）を利用した時間はどのくらいですか。

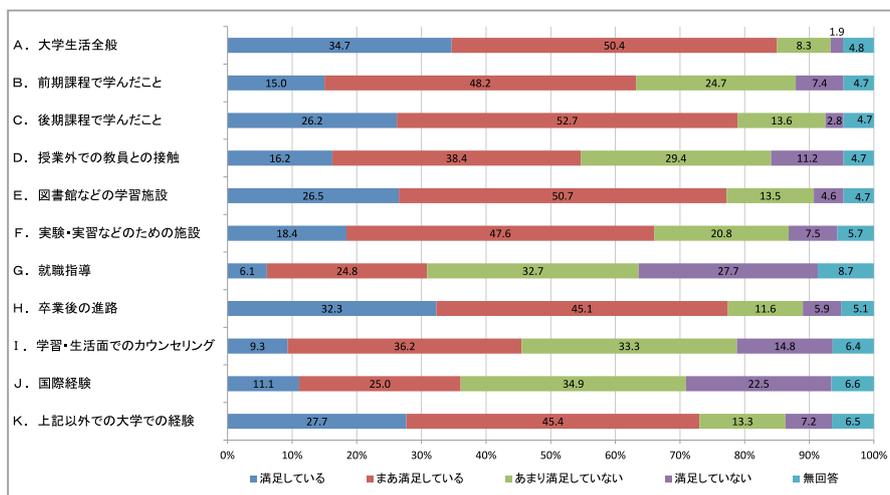


今年度から初めてインターネットの利用時間についてたずねた。学期中と休暇中では大きな差はないが、休暇中は学期中に比べて利用時間が少なくなる者と多くなる者に分かれている。5時間以下は学期中が16.8%、休暇中が15.5%に対して、26時間以上は学期中が21.6%、休暇中が23.7%となっている。前問同様に

平均時間を算出すると、学期中が15.7時間、休暇中が16.4時間となっている。

満足度：「大学生生活全般」8割半、「前期課程」約6割、「後期課程」約8割「就職指導」への満足度は低いが、「卒業後の進路」については約8割が満足

Q17 あなたの大学生生活を通じた満足度についてお聞きします。

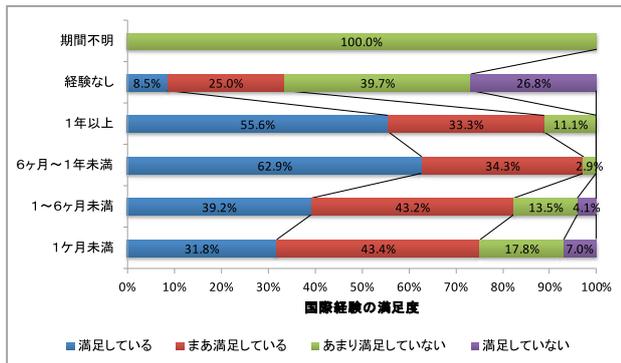


「A. 大学生生活全般」に満足している者は85.1%（「満足している」34.7%と「まあ満足している」50.4%を合わせた回答、以下同じ）である。「B. 前期課程で学んだこと」（63.2%）は約6割、「C. 後期課程で学んだこと」（78.9%）は約8割、「H. 卒業後の進路」（77.4%）も約8割が満足している。

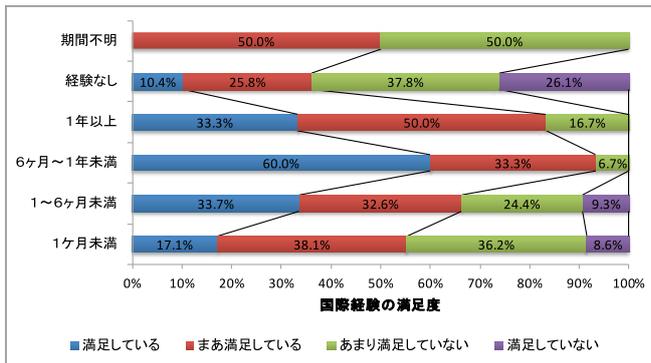
これに対して、「G. 就職指導」の満足度は3割（30.9%）と依然として低いが、2014年度より5%上昇している。とくに、卒業後の進路（Q21、後述）と明確な関連はみられない。「I. 学習・生活面でのカウンセリング」（45.5%）も4割強の者しか満足していない。「D. 授業外での教員との接触」（54.6%）についても、満足している者は約半数に過ぎない。さらに、「J. 国際経験」の満足度は前年よりやや上昇したものの、約3分の1（36.1%）に過ぎない。なお、「E. 図書館などの学習施設」の満足度は年々減少傾向にある（グラフ省略）。

留学経験者の「国際経験」の満足度は高い

大学のプログラム／推薦により留学した



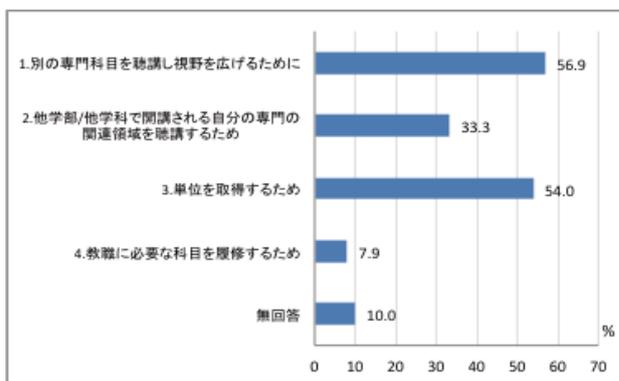
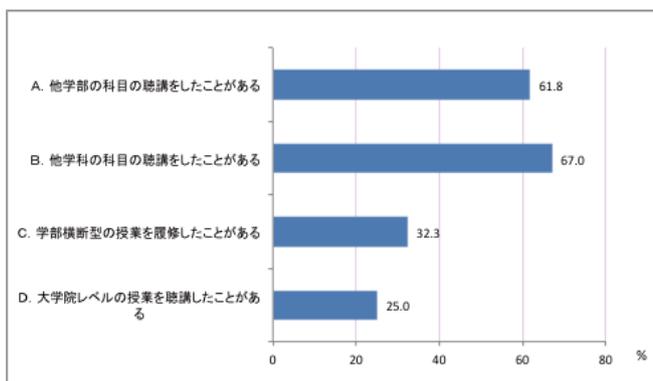
個人留学した(語学学習)



左の図は、後述の「Q22 A. 大学のプログラム／推薦により留学した」と「Q17 J. 国際経験」の満足度との関連を示したものである。国際交流経験のない者では、満足度（「満足している」と「まあ満足している」を合わせた割合）は33.5%と著しく低く、国際交流経験のある者の方が満足度は高まっている。また、留学経験の長い者ほど満足度は高い。右の図は、同じように、「Q22B. 個人留学した(語学学習)」と「Q17J. 国際経験」の満足度との関連を示したものである。「大学のプログラム／推薦により留学した」と同様に、個人留学の国際交流経験のない者では、満足度は著しく低く、国際交流経験のある者の方が満足度は高い。留学経験のある者のなかでは、「6ヶ月～1年未満」の者の満足度が最も高くなっている。

「他学部聴講」の経験者は6割以上、「視野を広げる」ための聴講が6割弱

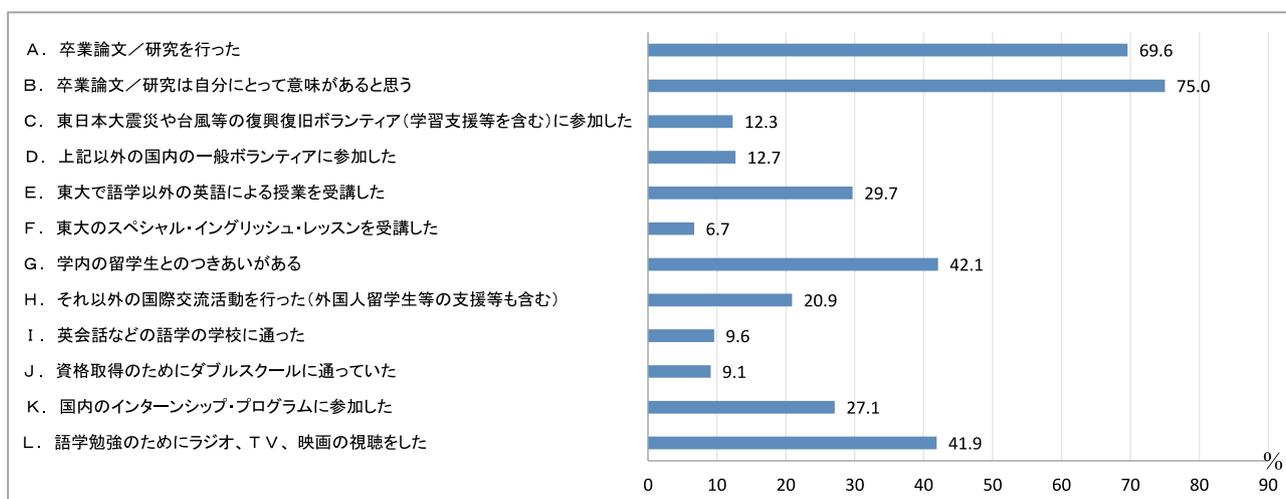
Q18 他学部・他学科聴講などについてお聞きします。 Q18-SQ 他学部・他学科聴講を行った人にお聞きします。どういう意図で聴講しましたか。



「A. 他学部の科目の聴講をしたことがある」者(61.8%)と「B. 他学科の科目の聴講をしたことがある」者(67.0%)は、6割以上となっている。「C. 学部横断型の授業を履修したことがある」(32.3%)は約3分の1、「D. 大学院レベルの授業を聴講したことがある」(25.0%)は4分の1となっている。ただし、「D. 大学院レベルの授業を聴講したことがある」を除くと、2015年度のほかの3項目の割合はいずれも2014年度より大きい。他学部・他学科聴講の意図は、「1.別の専門の科目を聴講して視野を広げるために」が56.9%と最も高い割合となっているが、「3.単位を取得するため」も54.0%と高い。

「卒業論文は意味がある」「卒業論文／研究を行った」：約7割、「留学生とのつきあい」：約4割、「国内のインターンシップ」：約4分の1

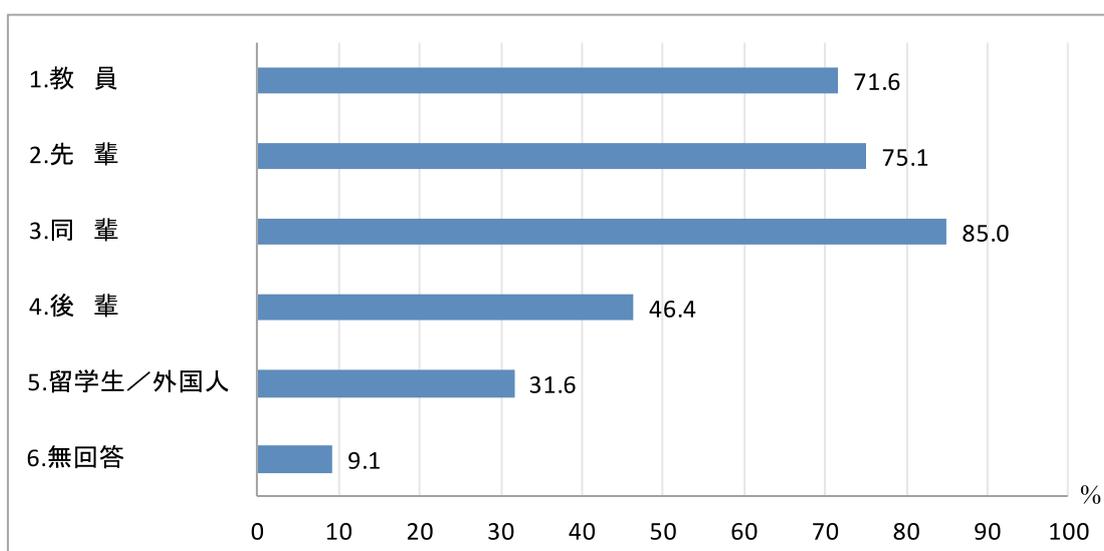
Q19 国内の在学時の学習機会・経験についてお聞きします。



在学時の学習機会・経験として高く評価されているのは「B. 卒業論文／研究は自分にとって意味があると思う」(75.0%)と「A. 卒業論文／研究を行った」(69.6%)で7割前後になっている。「B. 卒業論文／研究は自分にとって意味があると思う」は「A. 卒業論文／研究を行った」学生に限ると96.4%とほとんどの者が意味があるとしている。また、「G. 学内の留学生とのつきあいがある」は42.1%、「K. 国内のインターンシップ・プログラムに参加した」は27.1%、「C. 東日本大震災や台風等の復興復旧ボランティア(学習支援等を含む)に参加した」は12.3%となっている。

「教員との学問的交流」約7割、「同輩」約8割半、「先輩」4分の3、「後輩」約5割

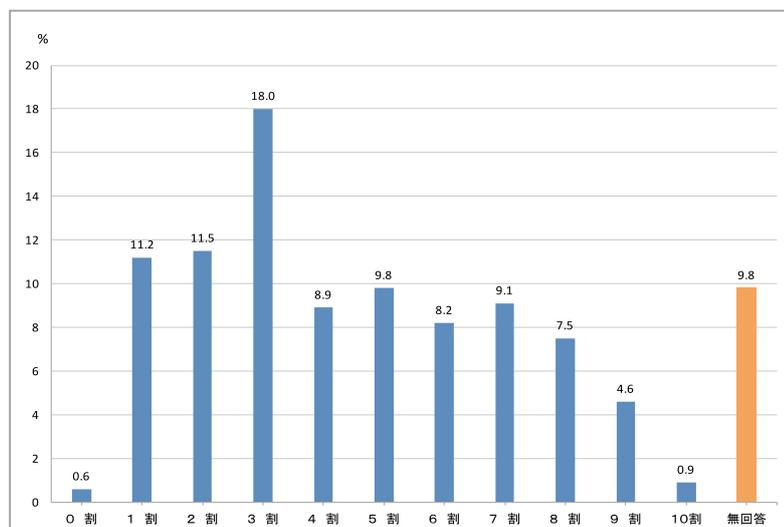
Q20 あなたは、次のような人と学問的な交流がありましたか。



最も学問的な交流があったのは、「3. 同輩」で約8割半(85.0%)、次いで「2. 先輩」が4分の3(75.1%)、「1. 教員」が7割(71.6%)となっており、「4. 後輩」は半数以下(46.4%)、「5. 留学生／外国人」約3分の1(31.6%)にとどまっている。

「優の割合」は3割が最も多く、次いで2割と1割

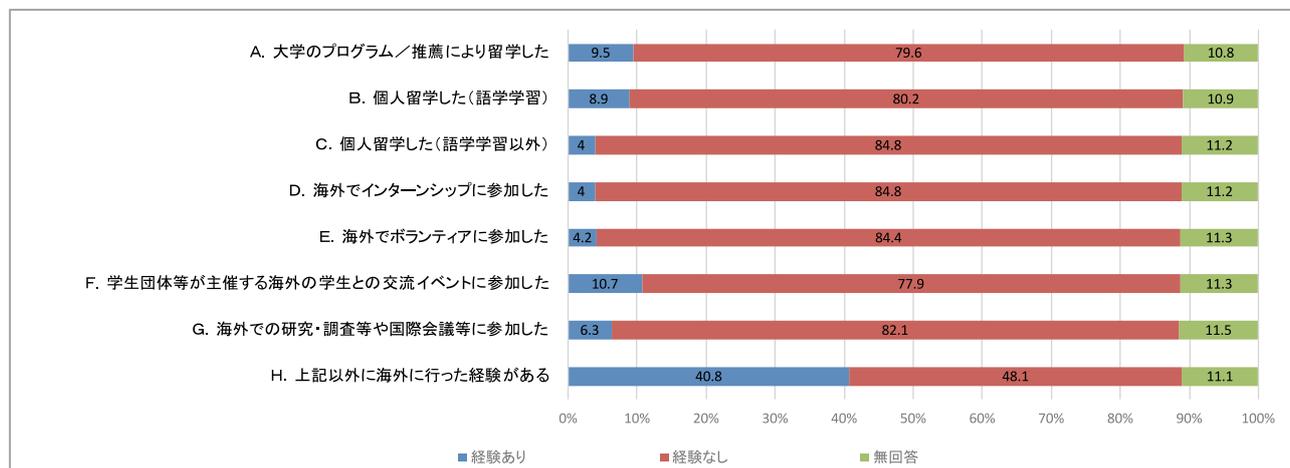
Q21 あなたの成績についてお聞きします。「優」(A)は何割くらいありましたか。数値を()に記入してください(「優上」を含めた割合をお答えください)。



成績の自己評価について、優の割合で見ると、「3割」が18.0%と最も多く、次いで「2割」が11.5%、「1割」が11.2%となっており、対称ではなく、右に歪んだ分布になっている。「5割」、「7割」もそれぞれ9.8%、9.1%とやや高い割合を占め、平均では、4.4割となっている。

「海外経験」:「学生団体等が主催する海外の学生との交流イベント」と「大学のプログラム/推薦により留学」は約1割、「個人留学(語学学習)」は1割以下

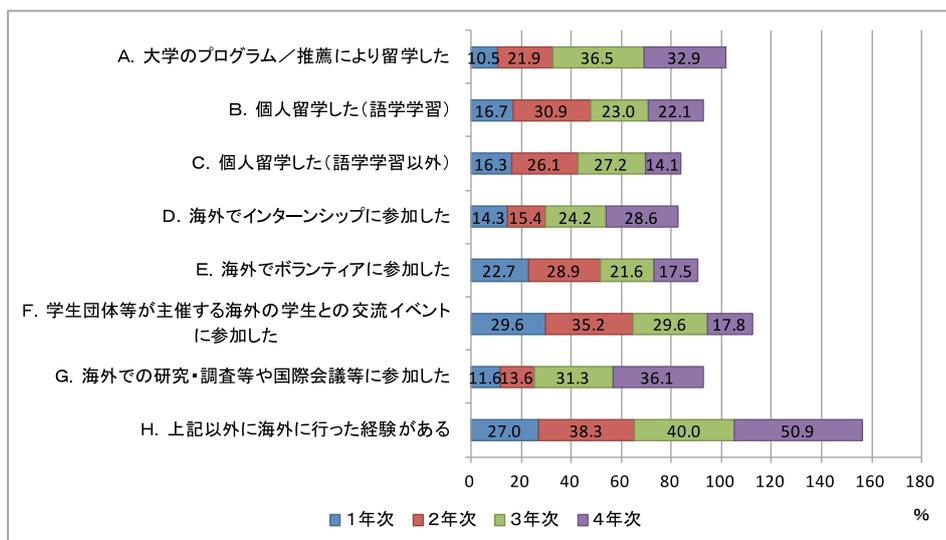
Q22 在学時の海外経験について、それぞれあてはまる番号に○をつけてください。



在学時の海外経験で、最も高い割合を示すのは、「F. 学生団体等が主催する海外の学生との交流イベントに参加した」10.7%で、次に「A. 大学のプログラム/推薦により留学した」9.5%、「B. 個人留学した(語学学習)」は8.9%、「G. 海外での研究・調査等や国際会議等に参加した」は6.3%の順である。これに対して、「E. 海外でボランティアに参加した」は4.2%、「C. 個人留学した(語学学習以外)」と「D. 海外でインターンシップに参加した」はともに4.0%と経験者の割合は低い。これに対して、「H. 上記以外に海外に行った経験がある」は40.8%と4割になっている。「A. 大学のプログラム/推薦により留学した」は、年度ごとに増加している(24頁)。

「海外経験」の時期：学年をあげるにつれて増加する傾向、「大学のプログラム／推薦により留学」、「個人留学（語学学習以外）」は3年次、「学生団体等が主催する海外の学生との交流イベント」、「海外ボランティア」は2年次が最も高い割合

Q. 22- SQ 前問で A から H のいずれかに 1 から 4 と回答された人にお聞きします。経験した学年（複数の学年にわたる場合には開始した学年から終了した学年。複数の学年で複数回経験している場合にはそれぞれの学年）にすべて○をつけてください。

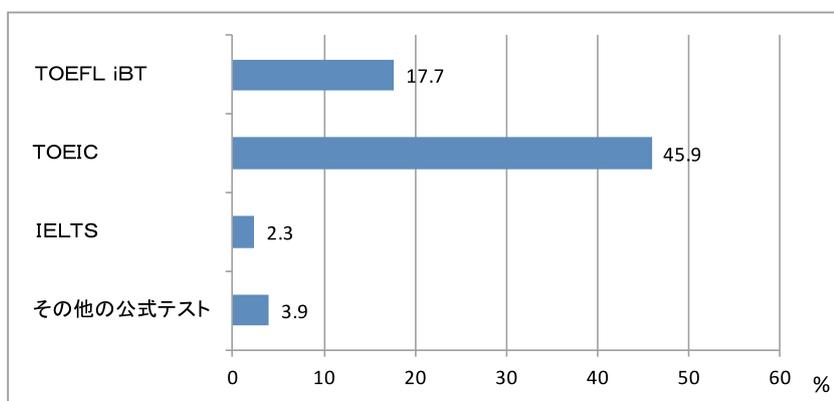


前問 (Q22) の海外経験について、経験者に何年次に経験をしたかをたずねた。図は 4 年制の場合で、複数回答のため、合計は 100% を超えている。国際活動の時期は、1 年次は少なく、学年が上がるに従って割合が高くなる傾向が見られる。しかし、「A. 大学のプログラム／推薦により留

学した」、「C. 個人留学した（語学学習以外）」は 3 年次、「B. 個人留学した（語学学習）」、「E. 海外でボランティアに参加した」、「F. 学生団体等が主催する海外の学生との交流イベントに参加した」は 2 年次が最も高い割合となっている。

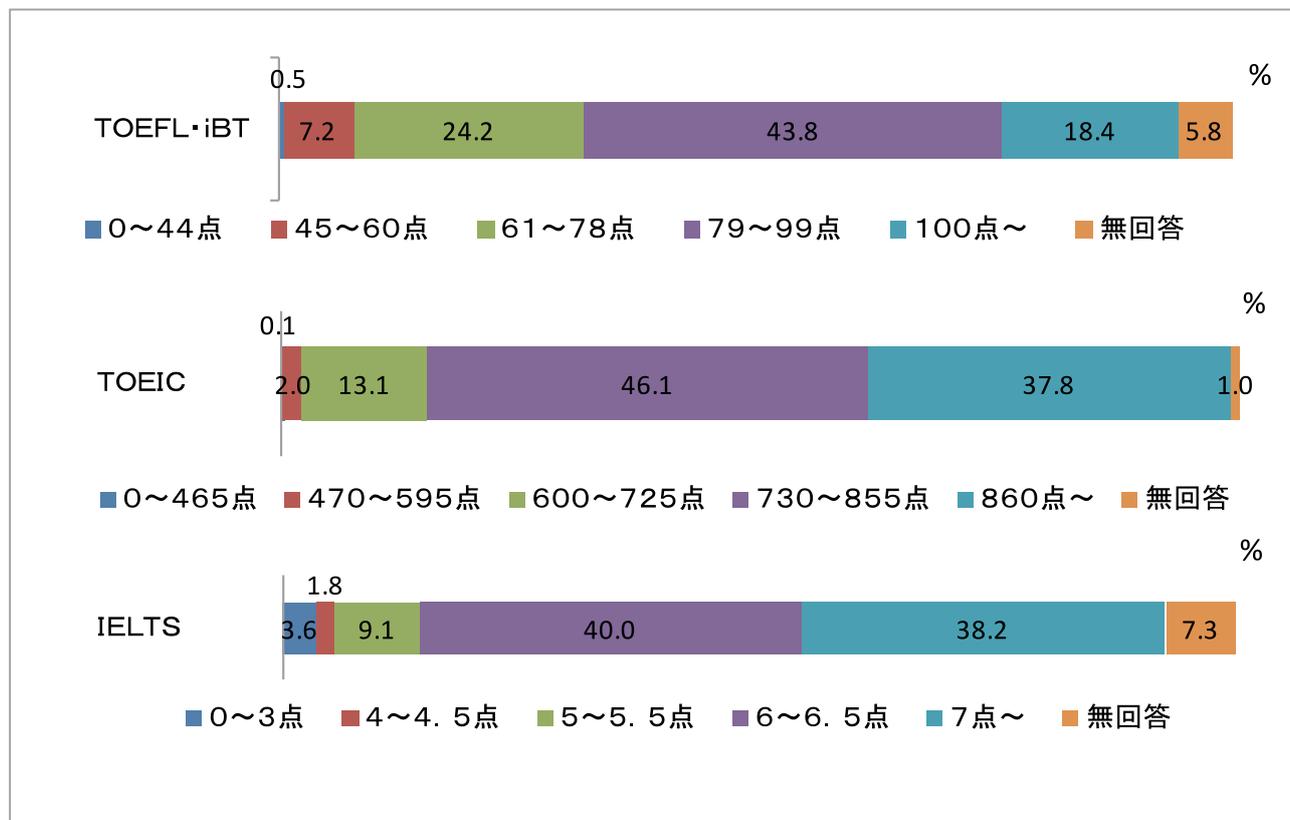
「TOEFL iBT 受験者」は約 2 割、「TOEIC 受験者」は半数近い

Q23 あなたは、在学中に TOEFL iBT や TOEIC や IELTS 等の公式テストを受験したことがありますか。



TOEFL iBT の受験者は 17.7% (2014 年度 18.5%, 以下同じ)、TOEIC 受験者は 45.9% (46.0%)、IELTS 受験者は 2.3% (2.4%)、その他の公式テストは 3.9% (3.1%) となっている。その他の公式テストを除いて、いずれもやや減少傾向にある。

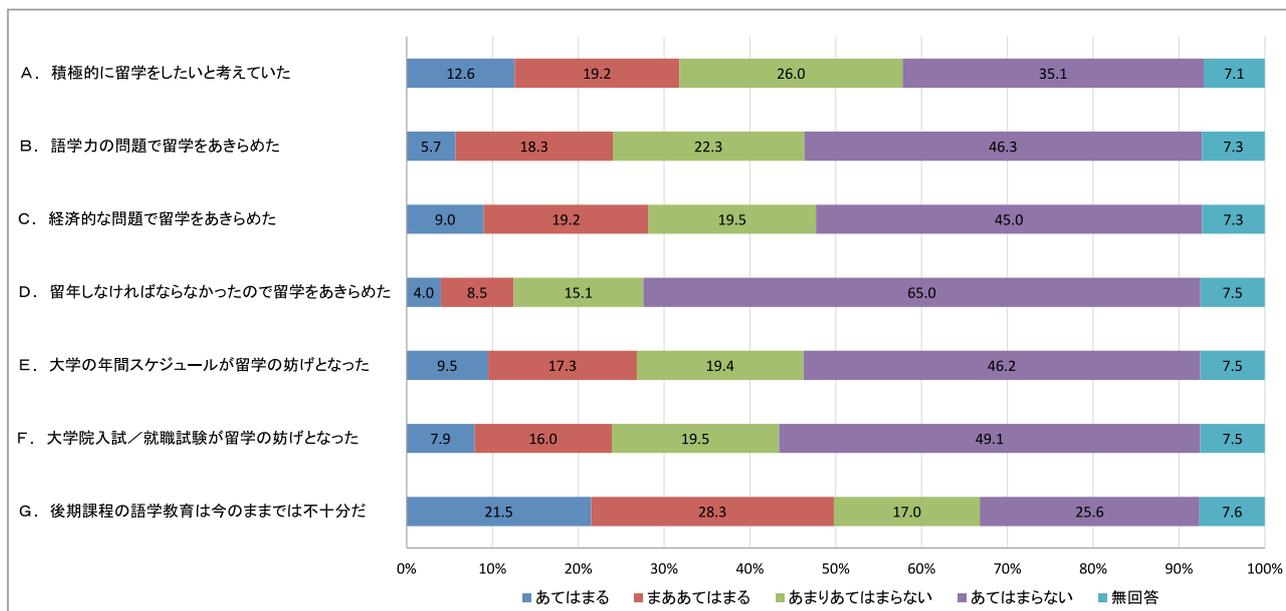
TOEFL iBT は「79 から 99 点」、TOEIC は「730 ～ 855 点」、IELTS は「7 点以上」が最も高い割合



それぞれの得点の分布は、満点が異なるため、割合で示すと、TOEFL iBT は「79 ～ 99 点」(43.8%)、TOEIC は、「730 ～ 855 点」(46.1%)、IELTS は「6-6.5 点以上」(40.0%) が最も高い割合となっている。なお、TOEIC は 2013 年度では「860 点以上」(42.9%) が最も高い割合であったが、2014 年度では 40.2%、2015 年度では 37.8%とやや低くなっている。

「留学への障害」は「経済的な問題」が約3割、「大学の年間スケジュール」と「語学力」と「大学院入試／就職試験」が約4分の1で、いずれも趨勢としては減少傾向

Q24 留学や語学学習についてお聞きします。



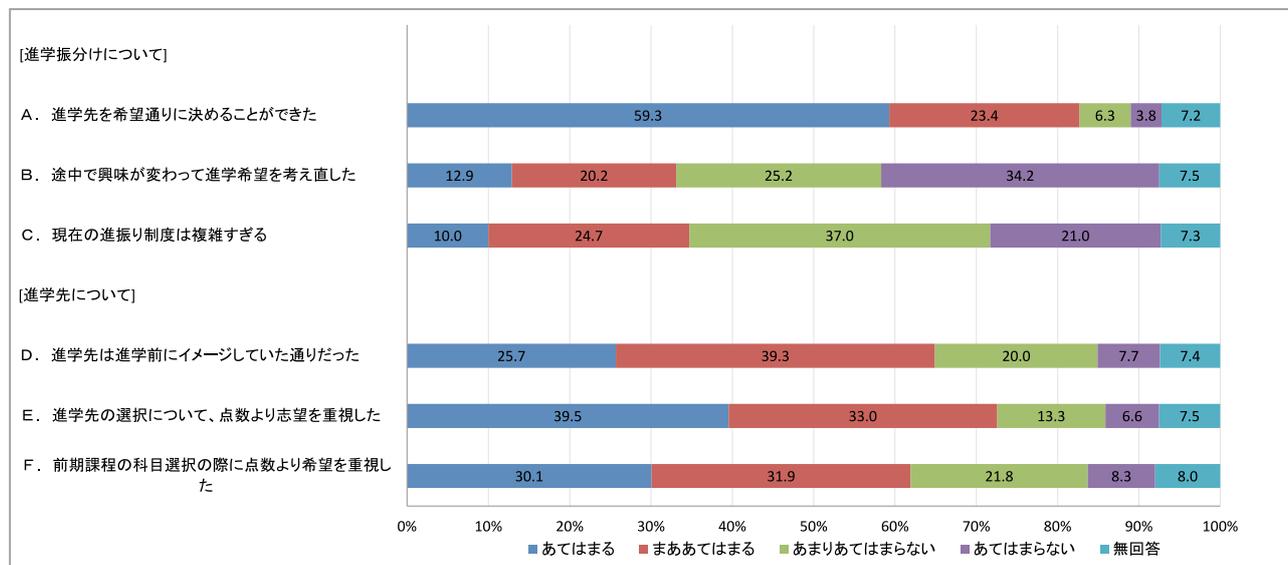
留学の障害としては、「C. 経済的な問題で留学をあきらめた」者は、約3割（あてはまると9.0%と「まああてはまる」19.2%を合わせて28.2%、以下同じ）、「E. 大学の年間スケジュールが留学の妨げとなった」者（26.8%）と「B. 語学力の問題で留学をあきらめた」者（24.0%）、「F. 大学院入試／就職試験が留学の妨げとなった」者（23.9%）では、それぞれ約4分の1となっている。また「E. 大学の年間スケジュールが留学の妨げとなった」者は、2012年度の34.8%、2013年度の26.7%、2014年度24.8%と減少する傾向にあったが、2015年度には26.8%とやや増加している（27頁）。「F. 大学院入試／就職試験が留学の妨げとなった」者は23.9%で、2013年度の21.6%、2014年度の21.1%より若干増加している。「B. 語学力の問題で留学をあきらめた」、「C. 経済的な問題で留学をあきらめた」、「E. 大学の年間スケジュールが留学の妨げとなった」、「F. 大学院入試／就職試験が留学の妨げとなった」は趨勢としては年々減少傾向にあるが、今年度はやや増加している（26-27頁）。これに対して、「A. 積極的に留学したいと考えていた」者は多少増減があるものの、2015年度には「あてはまる」12.6%と「まああてはまる」19.2%で合わせて31.8%で、2010年度の35.5%、2013年度の31.7%、2014年度の30.3%へと、やや減少傾向にあるが、2015年度は微増している（28頁）。

さらに、「G. 後期課程の語学教育は今のままでは不十分だ」とする者は49.8%で、2011年度の64.4%、2012年度の56.5%、2013年度の52.1%、2014年度の49.1%と減少する傾向にあるが、2015年度はわずかに増加している（28頁）。

2013年度から調査した「D. 留年しなければならなかったため留学をあきらめた」者は「あてはまる」4.0%と「まああてはまる」8.5%を合わせて12.5%で2014年度の12.4%とほぼ同じ割合になっている。

「進学先」は「希望通り」：8割以上、「進学希望を考え直した」：約3分の1

Q25 進学振分けや進学先についてお聞きします。



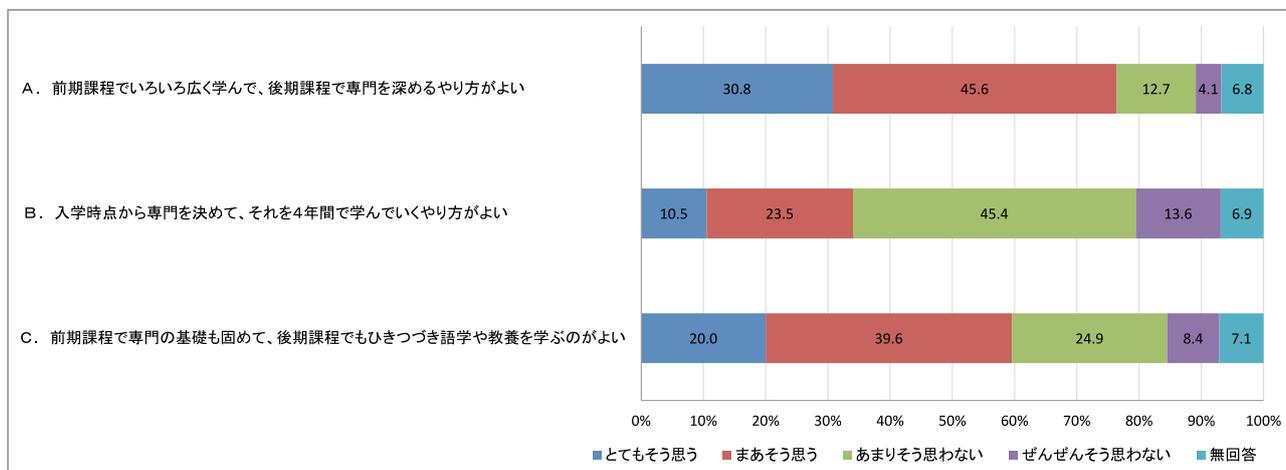
「A. 進学先を希望通りに決めることができた」者は、82.7%（「あてはまる」59.3%と「まああてはまる」23.4%を合わせて、以下同じ）8割を超えている。ただし、「B. 途中で興味が変わって進学希望を考え直した」者も3分の1（33.1%）となっている。さらに、「D. 進学先は進学前にイメージしていた通りだった」者は、65.0%で約3分の2だが、「C. 現在の進振り制度は複雑すぎる」は34.7%で約3分の1の者が複雑すぎるとしている。「E. 進学先の選択について、点数より志望を重視した」は、約7割（72.5%）となっている。「F. 前期課程の科目選択の際に点数より希望を重視した」は約6割（62.0%）である。

「A. 進学先を希望通りに決めることができた」者は、2010年度は87.6%で、2013年度には83.5%、2014年度には81.9%、2015年度には82.7%と2015年度は微増しているものの、大きくみれば、やや減少傾向にある（34頁）。また、「B. 途中で興味が変わって進学希望を考え直した」者は、2008年度には36.6%で、2013年度は32.5%、2015年度33.1%となっている。

「G. 全科類枠で進学した」で進学した者の割合は、8.0%となっている（グラフ省略）。

「前期課程は幅広く、後期課程は専門を深める」現行方式を評価する者が約4分の3だが、「後期課程でも語学や教養を学ぶのがよい」という者も6割

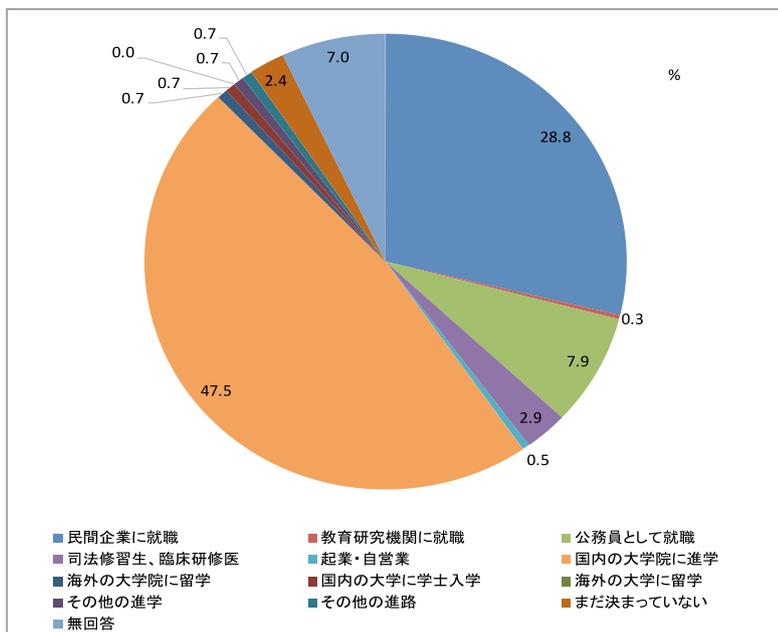
Q26 専門と教養の学習の仕方についていくつかの考え方があります。次の項目についてあなたはどのように考えていますか。



専門と教養の学習の仕方については、「A. 前期課程でいろいろ広く学んで、後期課程で専門を深めるやり方がよい」という現行方式を支持する者が、「とてもそう思う」30.8%と「まあそう思う」45.6%を合わせて約4分の3（76.4%）で、これに対して、「B. 入学時点から専門を決めて、それを4年間で学んでいくやり方がよい」という方式を支持する者は約3分の1（34.0%）となっている。また、両者の中間の方式として「C. 前期課程で専門の基礎も固めて、後期課程でもひきつづき語学や教養を学ぶのがよい」とする者も59.6%と6割となっている。

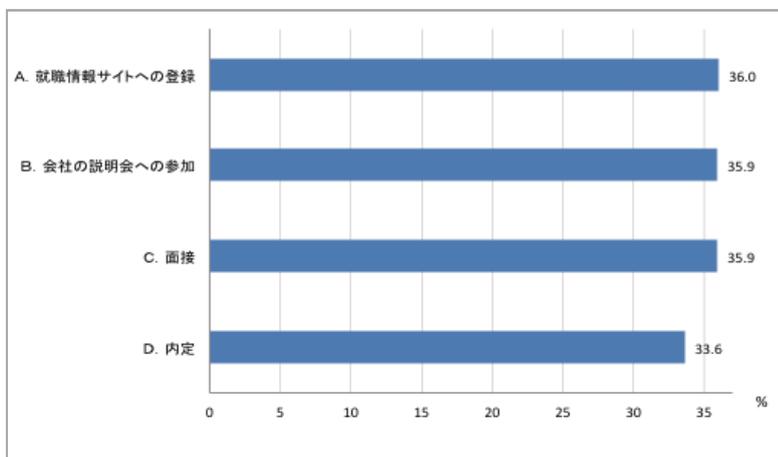
「卒業後の予定」：「進学」が半数近く、「就職」が4割

Q27 4月からの予定は、下の項目ではどれにあたりますか。



4月からの予定としては、「国内の大学院に進学」が47.5%と最も多く、「海外の大学院に留学」(0.7%)と合わせて、大学院進学予定は、約半数(48.2%)となっている。さらに、「国内の大学に学士入学」(0.7%)と「その他の進学」(0.7%)を合わせて進学は49.6%と半数に近い。これに対して、「企業に就職」は約3割(28.8%)で、「教育研究機関に就職」(0.3%)、「公務員として就職」(7.9%)、「司法修習生、臨床研修医」(2.9%)、「起業・自営業」(0.5%)と合わせて就職予定は、4割(40.4%)となっている。進路未定は2.4%ときわめて少ない。

Q27 民間企業への就職活動を行った人のみお答えください。あなたはつぎのような就職活動を経験しましたか。経験した場合には()に時期を記入してください。



民間企業への就職活動としては、「A. 就職情報サイトへの登録」(36.0%)と最も高い割合を示しているが、以下、「B. 会社の説明会への参加」と「C. 面接」がともに35.9%と等しい。また、「D. 内定」に関しては、33.6%が「内定」を受けている。なお、4月からの予定(Q27)を「働く」とした者に限ると92.4%が「内定」を受けている。

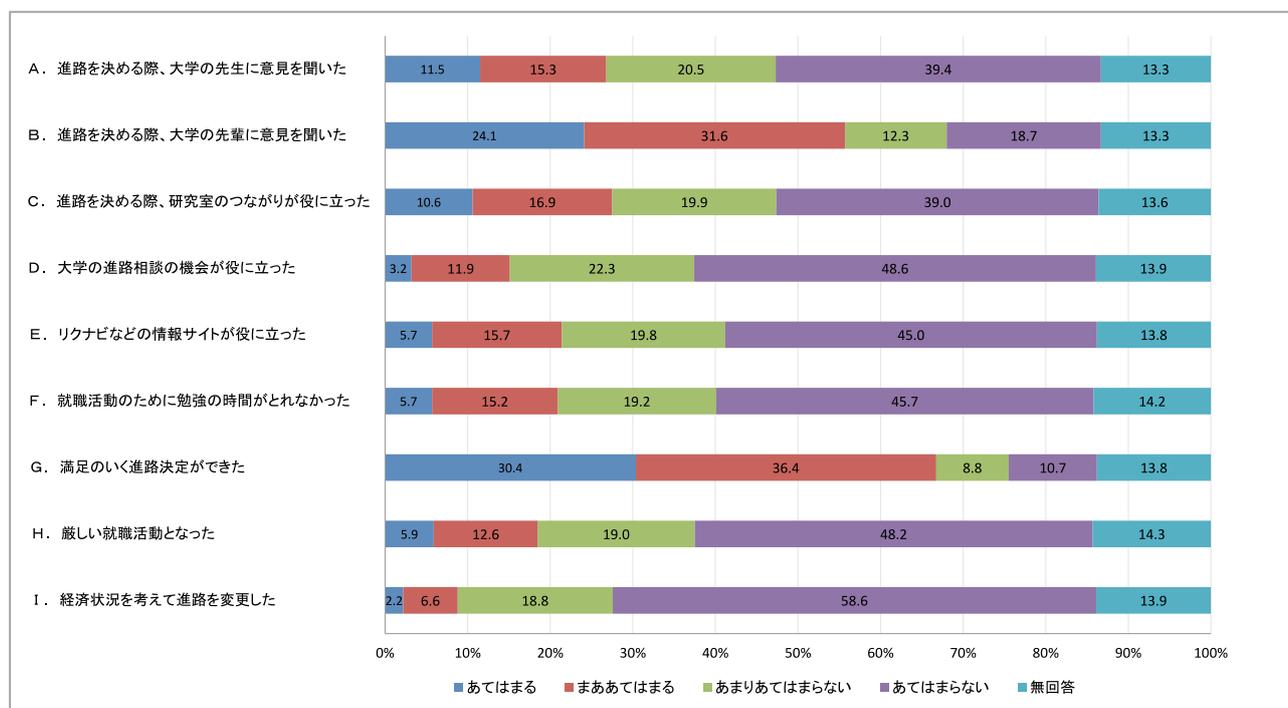
「民間企業への就職活動の時期」は3年生後期に集中

合計	1年生	2年生	3年生 前期 (4-9月)	3年生 後期 (10-翌3月)	4年生 前期 (4-9月)	4年生 後期 (10-翌3月)	5年生 前期 (4-9月)	5年生 後期 (10-翌3月)	6年生 前期 (4-9月)	6年生 後期 (10-翌3月)	年or月 不明	無回答
A. 就職情報サイトへの登録	0.1	1.5	28.7	43.9	6.5	11.8	1.4	1.0	0.2	-	1.5	3.3
B. 会社の説明会への参加	-	0.7	15.2	42.4	17.3	15.8	1.3	0.8	0.5	0.1	2.0	4.0
C. 面接	-	0.5	13.2	13.2	57.7	5.7	1.0	0.3	2.5	0.2	1.4	4.1
D. 内定	-	-	7.1	8.2	68.6	6.1	1.3	0.5	1.7	1.2	1.1	4.0

民間企業への就職活動の時期については、表のように、「A. 就職情報サイトへの登録」と「B. 会社の説明会への参加」は3年生後期に集中しており、「C. 面接」は4年生前期に集中している。「D. 内定」も4年生前期に68.6%と集中している。

「進路決定」：「大学の先輩の意見」が約6割、3分の2の者が「満足のいく進路決定ができた」が、「厳しい就職活動になった」も就職者の4割弱

Q28 あなたの卒業後の進路とその決定プロセスについてお聞きします。次のようなことは、どの程度あてはまりますか。



進路を決める際に、最も意見を聞いた者の割合が高いのは、「B. 先輩」(「あてはまる」24.1%と「まああてはまる」31.6%を合わせて55.7%、以下同じ)と6割近い。「A. 進路を決める際、大学の先生に意見を聞いた」(26.8%)と「C. 進路を決める際、研究室のつながりが役に立った」(27.5%)のは約3割で、「G. 満足 of いく進路決定ができた」(66.8%)のは3分の2となっている。「F. 就職活動のために勉強の時間がとれなかった」(20.9%)と「H. 厳しい就職活動となった」(18.5%)はともに約2割だが、4月からの予定(Q27)を「働く」とした者に限ると、それぞれ42.9%と35.7%と4割前後になる(グラフは省略)。また、「I. 経済状況を考えて進路を変更した」は、2014年度の9.5%から2015年度の8.8%へとわずかに減少している。「G. 満足 of いく進路決定ができた」と「H. 厳しい就職活動となった」は減少傾向にある(38頁)。

8回の調査で変化が見られる項目

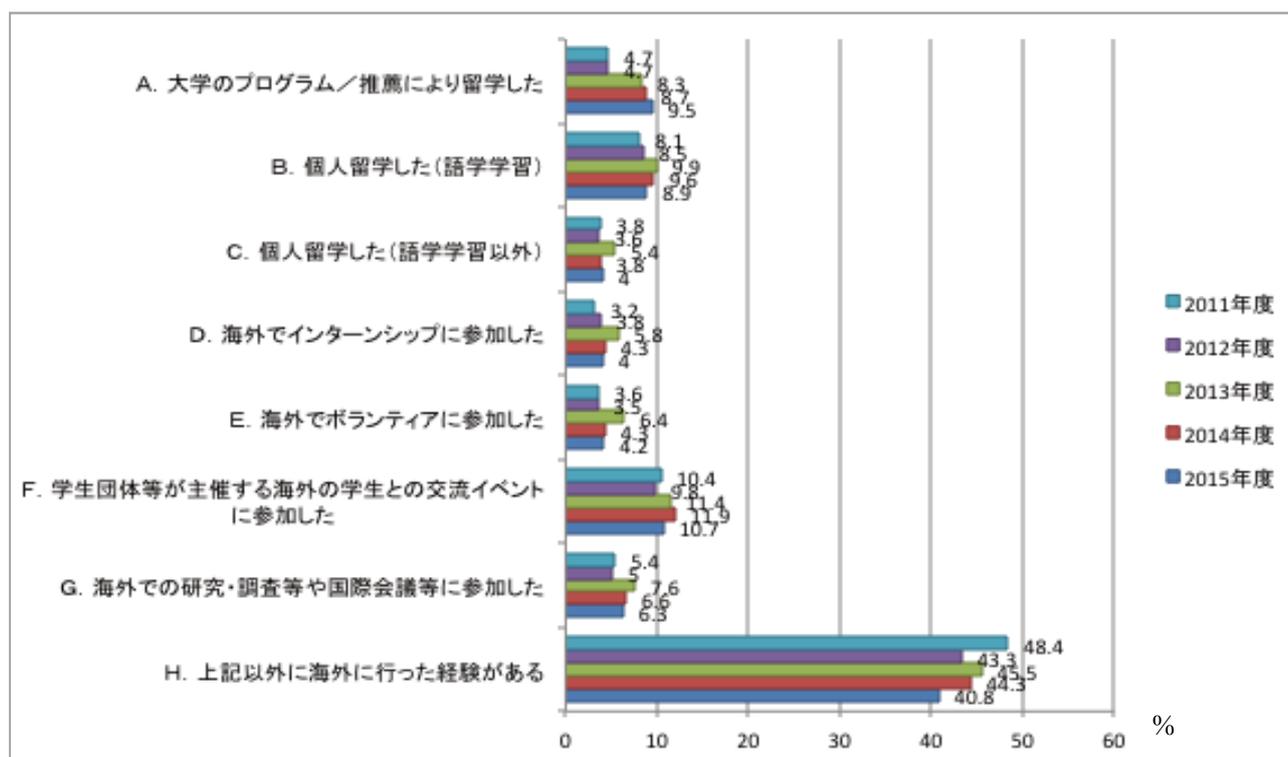
達成度調査は2008年度（2009年3月実施）の第1回から、2015年度（2016年3月実施）で、8回を数える。第1回の回収率は39.7%であったが、年度ごとに回収率は増加し、今回は79.9%となっている。

この8回の調査項目を時系列的に見ると、多くの項目でそれほど大きな変化はみられない。もともと、身につけた能力の自己評価や満足度や意識などは比較的变化しにくい特性を持っている。しかし、それほど大きな差ではないが、この間に増加あるいは減少している質問項目も見られる。ここでは、それらの項目について、経年変化を見ることにする。

「国際活動」、「国際経験」、「満足度」、「外国語でコミュニケーションする能力」は増加する傾向にある

「大学のプログラム／推薦により留学した」者は増加傾向にある

Q22 在学時の海外経験について、それぞれあてはまる番号に○をつけてください。

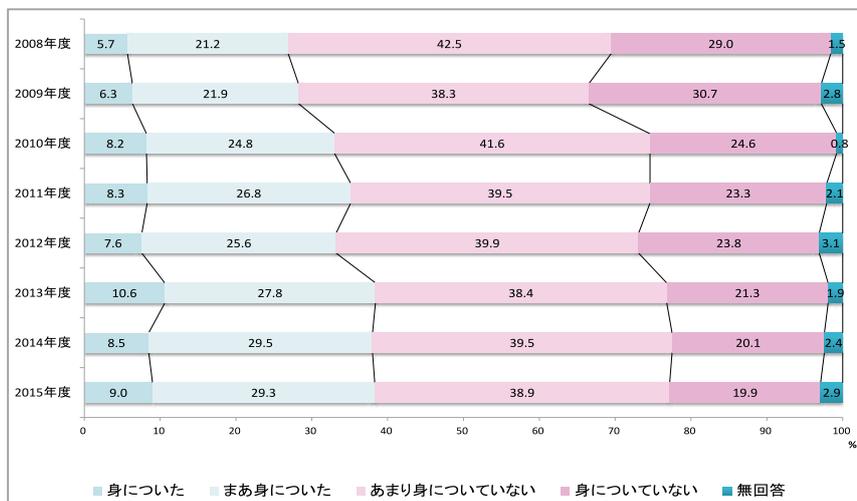


「A. 大学のプログラム／推薦により留学した」者は2011年度から4.7%、4.7%、8.3%、8.7%、9.5%と順調な増加傾向にある。「F. 学生団体等が主催する海外の学生との交流イベントに参加した」割合は、10.4%、9.8%、11.4%、11.9%、10.7%わずかな増減を繰り返している。これに対して、「D. 海外でインターンシップに参加した」は3.2%、3.8%、5.8%、4.3%、4.0%、「B. 個人留学した(語学学習)」は8.1%、8.5%、9.9%、9.6%、8.9%、「E. 海外でボランティアに参加した」は3.6%、3.5%、6.4%、4.3%、4.2%、「G. 海外での研究・調査等や国際会議等に参加した」は5.4%、5.0%、7.6%、6.6%、6.3%で、これらはいずれも2013年度をピークに増加していたが、その後はやや減少傾向にある。「H. 上記以外に海外に行った経験がある」は48.4%、43.3%、45.5%、44.3%、40.8%と近年やや減少傾向にある。

「外国語でコミュニケーションする能力」はやや増加する傾向にあるが、この3年間はほとんど変化なし

Q10 あなたは、大学時代を通じて、以下のような点を身につけたと思いますか。

外国語でコミュニケーションする能力

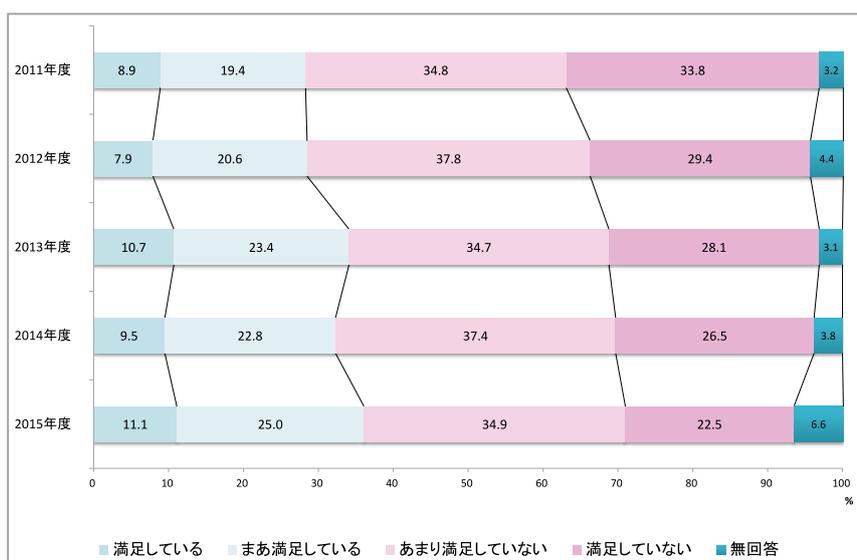


身につけた能力の自己評価で、この8年間に最も変化しているのは、「外国語でコミュニケーションする能力」で、2008年度には「身についた」5.7%、「まあ身についた」21.2%と合わせて26.9%であったが、年度ごとにやや増減はあるが、大きくみれば増加傾向にある。ただし、ここ3年間は「身についた」と「まあ身についた」と合わせて約38%と安定している。

「国際経験」の満足度は年度により増減するものの、増加する傾向にある

Q17 あなたの大学生活を通じて満足度についてお聞きします。

国際経験



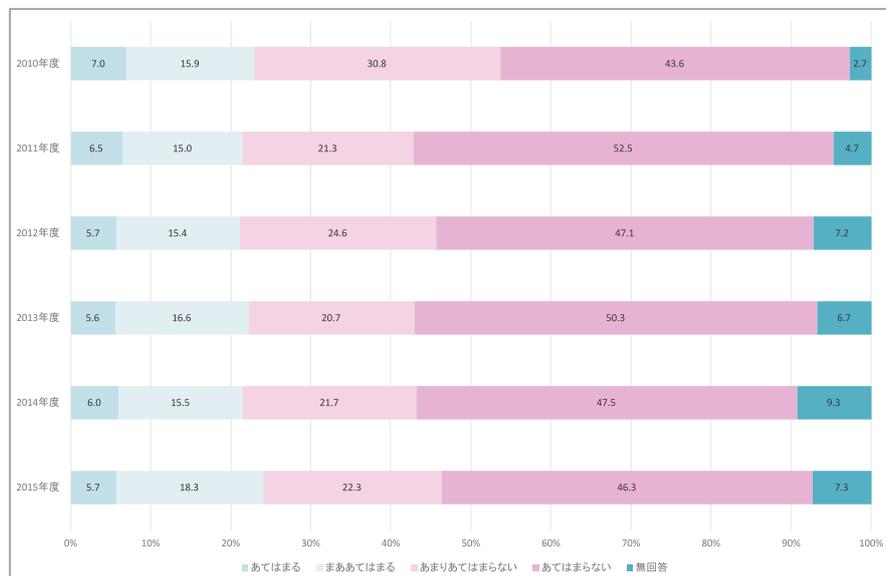
国際経験の満足度については、2011年度からたずねているが、2011年度は「満足している」8.9%と「まあ満足している」19.4%と合わせて28.3%であったが、2013年度は、それぞれ10.7%と23.4%で合わせて34.1%と増加傾向にあった。2014年度はやや減少したものの、2015年度は36.1%へと増加している。

「留学障害」は大幅に減少しているが、今年度はやや増加

「語学力の問題で留学をあきらめた」者はわずかに増減

Q24 留学や語学学習についてお聞きします。

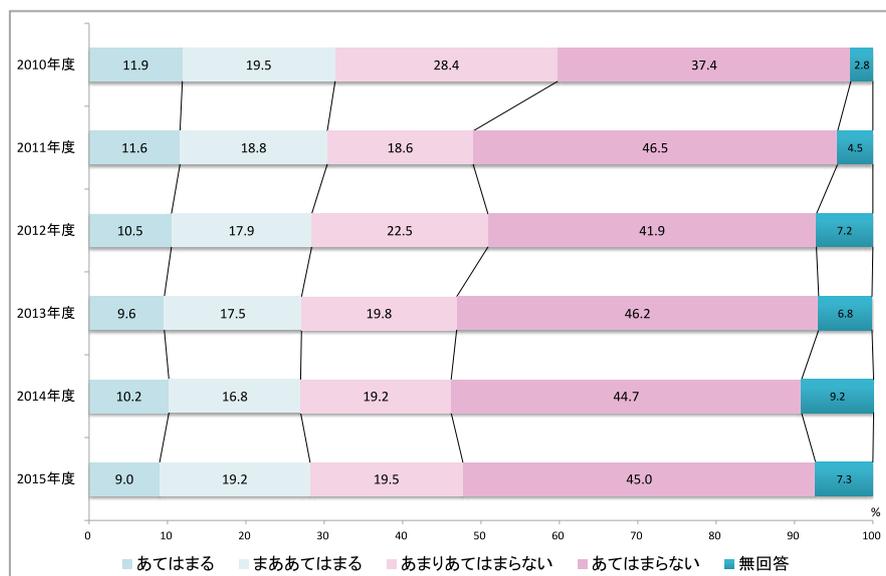
語学力の問題で留学をあきらめた



「語学力の問題で留学をあきらめた」者の割合は、最初に調査された2010年度は「あてはまる」7.0%、「まああてはまる」15.9%で合わせて22.9%であった。多少の増減はあるが、2015年度には「あてはまる」5.7%、「まああてはまる」18.3%で合わせて24.0%と、2014年度(21.5%)よりやや増加している。

「経済的な問題で留学をあきらめた」者も減少傾向だが2015年度はやや増加

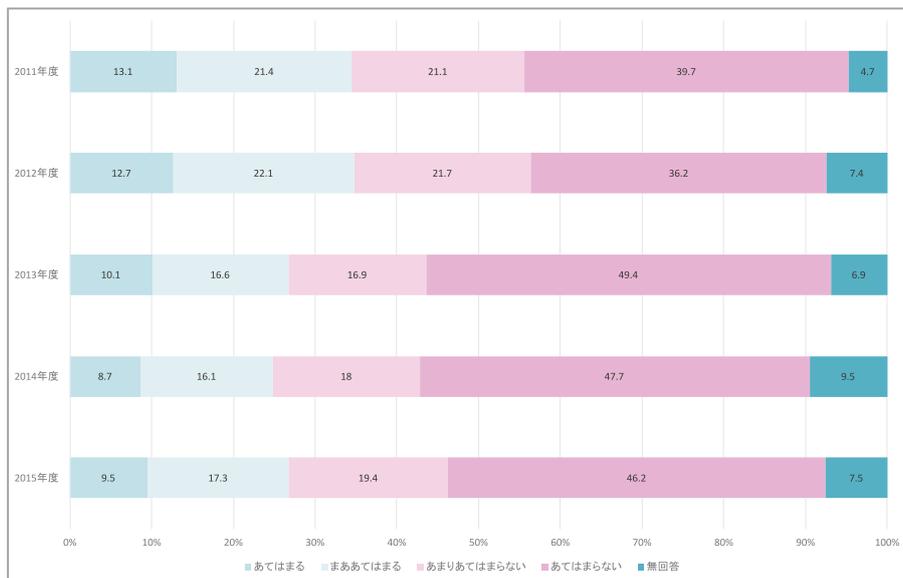
経済的な問題で留学をあきらめた



「経済的な問題で留学をあきらめた」者の割合は、最初に調査された2010年度は「あてはまる」11.9%、「まああてはまる」19.5%で合わせて31.4%であったが、ほぼ一貫して減少し、2014年度は27.0%になっていたが、2015年度には「あてはまる」9.0%、「まああてはまる」19.2%で合わせて28.2%と、やや増加している。

「大学の年間スケジュールが留学の妨げになった」者も減少傾向にあるが、2015年度はやや増加

大学の年間スケジュールが留学の妨げとなった



「大学の年間スケジュールが留学の妨げになった」者の割合は、最初に調査された2011年度は「あてはまる」13.1%、「まああてはまる」21.4%で合わせて34.5%であったが、2012年度はやや増加したものの、その後減少しており、2014年度は24.8%となっていたが、2015年度には「あてはまる」9.5%、「まああてはまる」17.3%で合わせ26.8%と、やや増加している。

「大学院入試／就職試験が留学の妨げとなった」者も大幅に減少傾向にあるが、2015年度は微増

大学院入試／就職試験が留学の妨げとなった



「大学院入試／就職試験が留学の妨げとなった」者の割合も、最初に調査された2011年度は「あてはまる」10.4%、「まああてはまる」20.1%で合わせて30.5%であった。その後、減少する傾向にあり、2014年度は21.1%であったが、2015年度には「あてはまる」7.9%、「まああてはまる」16.0%で合わせて23.9%と、やや増加している。

「後期課程の語学教育は不十分」とする者は大幅に減少する傾向にあるが、2015年度はやや増加

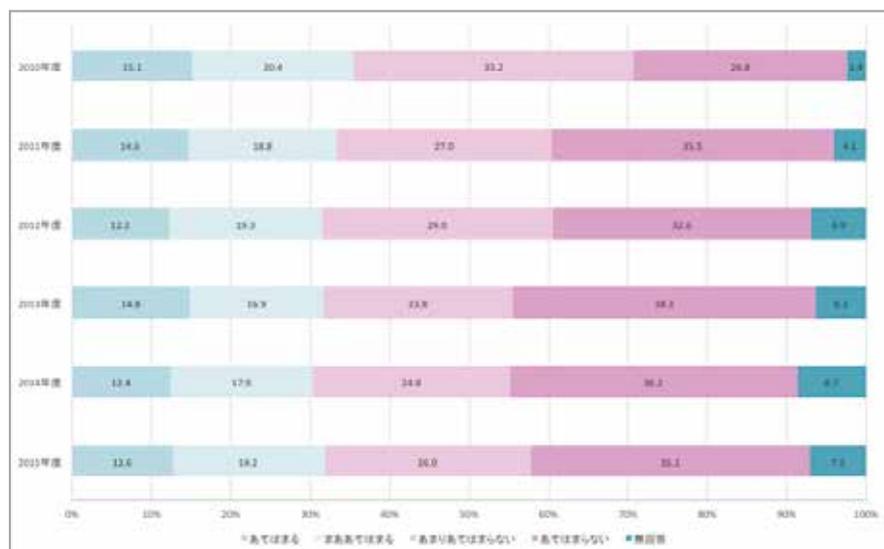
後期課程の語学教育は今のままでは不十分だ



「後期課程の語学教育は今のままでは不十分だ」とする者の割合も、最初に調査された2010年度は「あてはまる」34.2%、「まああてはまる」35.2%で合わせて69.4%であったが、一貫して減少し、2014年度には49.1%まで大幅に減少していたが、2015年度には「あてはまる」21.5%、「まああてはまる」28.3%で合わせて49.8%と、やや増加している。

「積極的に留学したい」者はやや減少傾向にあるが、2015年度はやや増加

積極的に留学したいと考えていた



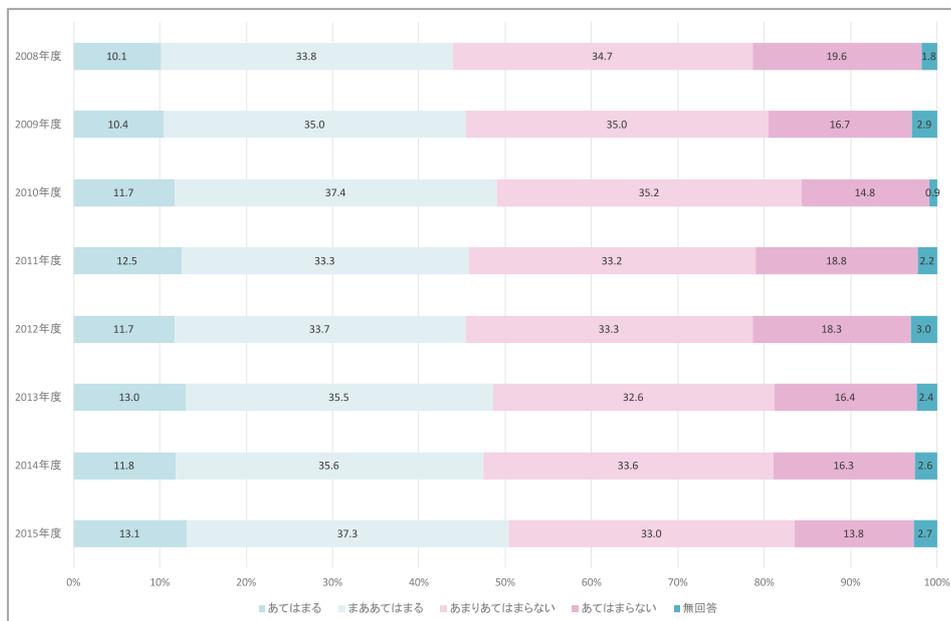
留学や語学学習について「積極的に留学をしたいと考えていた」者の割合は、最初に調査された2010年度は「あてはまる」15.1%、「まああてはまる」20.4%で合わせて35.5%であった。多少増減があるものの、2014年度は30.3%と減少していたが、2015年度には「あてはまる」12.6%、「まああてはまる」19.2%で合わせて31.8%とやや増加傾向にある。

「TAが機能」や「ボランティア」や「インターンシップ」への参加は増加傾向

「TA（ティーチング・アシスタント）が機能していた」は増加傾向

Q12 教員や教育制度との関係についてお聞きします。

TA(ティーチング・アシスタント)が機能していた

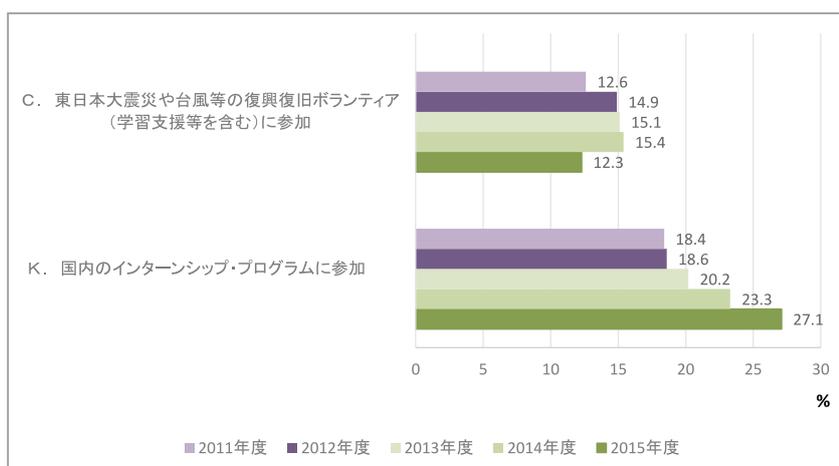


「TA（ティーチング・アシスタント）が機能していた」は、2008年度は「あてはまる」10.1%と「まああてはまる」33.8%を合わせて43.9%であったが、2014年度は47.4%、2015年度は50.4%と年々わずかずつではあるが、評価する者の割合が増加する傾向にある。

「ボランティア」に参加した者の割合は増加傾向にあったが、2015年度は減少。「インターンシップ」に参加した者の割合は増加傾向

Q19 国内の在学時の学習機会・経験についてお聞きします。

東日本大震災や台風等の復興復旧ボランティア（学習支援等を含む）／国内のインターンシップ・プログラムに参加した



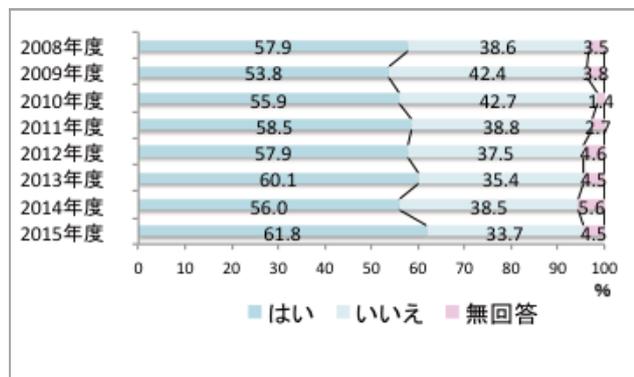
「東日本大震災や台風等の復興復旧ボランティア（学習支援等も含む）に参加」した者の割合も2011年度12.6%、2012年度14.9%、2013年度15.1%、2014年度15.4%と着実に増加していたが、2015年度は12.3%に減少している。

「国内のインターンシップ・プログラムに参加」した者の割合は、2011年度18.4%、2012年度18.6%、2013年度20.2%、2014年度23.3%、2015年度27.1%と着実に増加している。

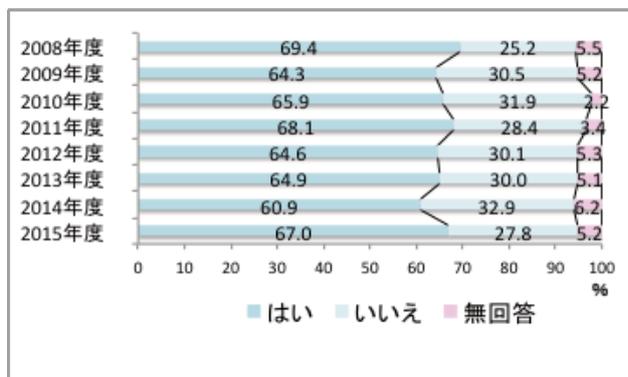
「他学部の科目の聴講」と「学部横断型授業の履修」は年度により増減するが、2015年度は過去最高、「大学院レベルの授業の聴講」は減少傾向

Q18 他学部聴講などについてお聞きます。

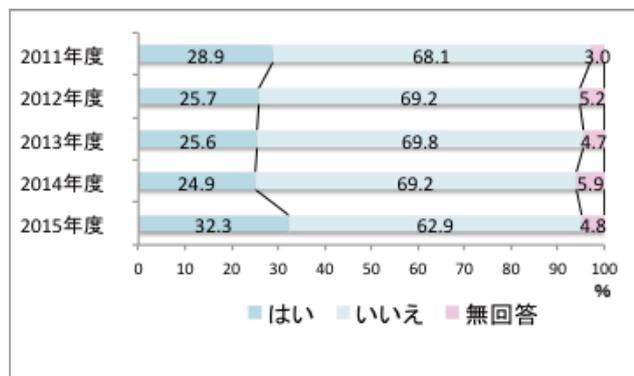
A. 他学部の科目の聴講をしたことがある



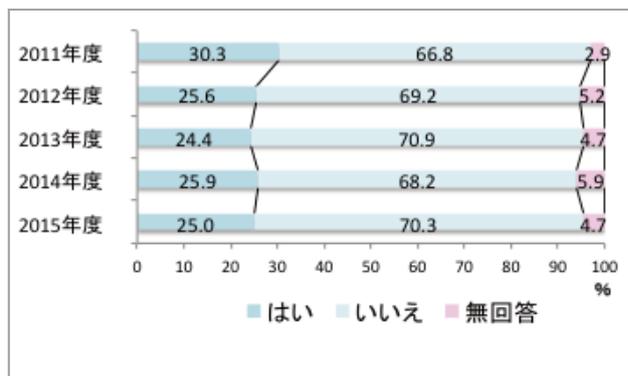
B. 他学科の科目の聴講をしたことがある



C. 学部横断型の授業を履修したことがある



D. 大学院レベルの授業を聴講したことがある



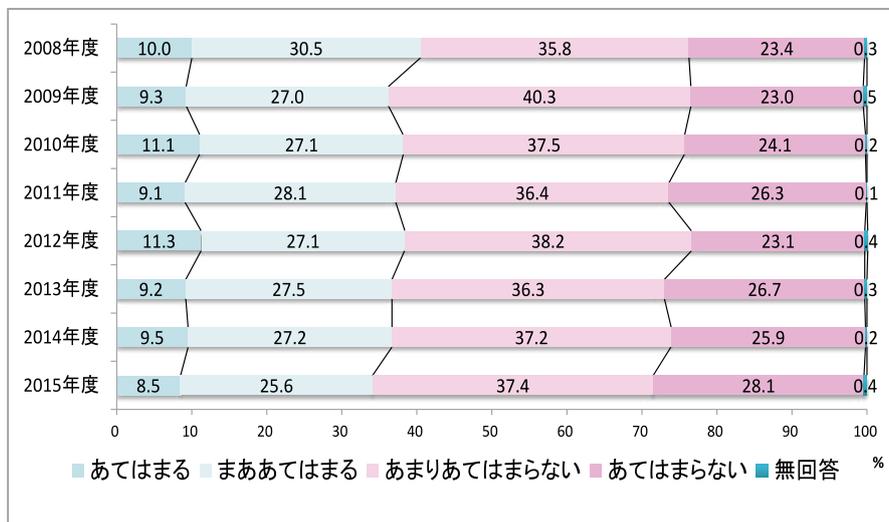
「他学部の科目を聴講したことのある」者の割合は、2008年度57.9%から、2011年度の58.5%まで増加していたが、2012年度以降は年度によって増減し、2015年度は61.8%とこれまでで最高となっている。また、「他学科の科目の聴講」も同様に年度による増減はあるが、2008年度の69.4%から2014年度の60.9%に減少したあと、2015年度には67.0%へと増加している。「学部横断型の授業の履修」は2011年度からたえずねているが、2011年度の28.9%から2014年度の24.9%と減少したものの、2015年度は32.3%とこれまでの最高となっている。「大学院レベルの授業の聴講」は2011年の30.3%から2015年度の25.0%と、減少傾向にある。

評価が下がったり、経験している割合が低くなっている項目もある

「大学に入ってからやりたいことが明確に決まっていた」者はわずかに減少

Q8 入学時の様子についてお聞きします。次のことは、どの程度あてはまりますか。

大学に入ってからやりたいことが明確に決まっていた

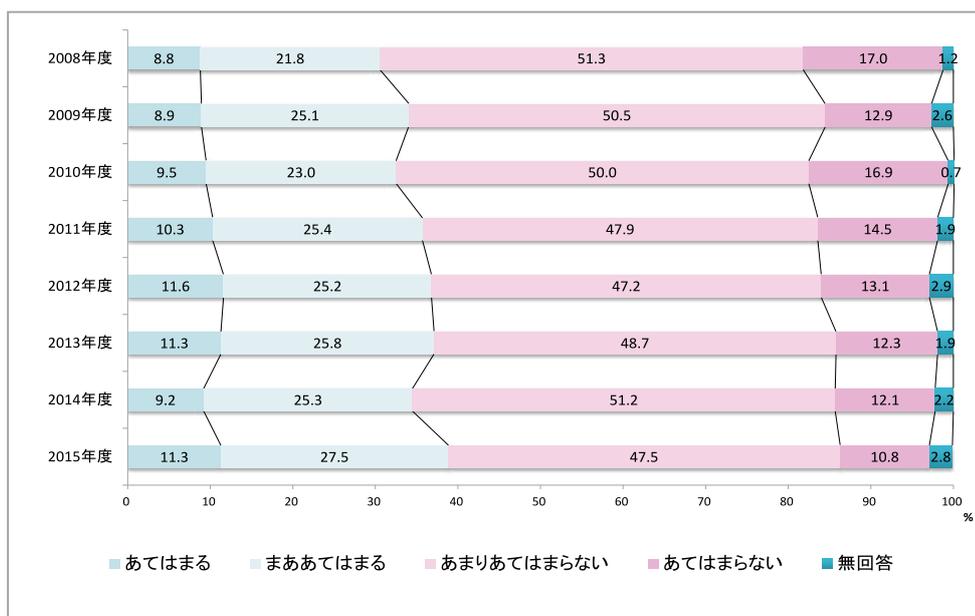


入学時の様子について、「大学に入ってからやりたいことが明確に決まっていた」者の割合は、年度ごとに増減はあるが、2008年度「あてはまる」10.0%、「まああてはまる」30.5%で合わせて40.5%であるのに対して、2015年度は「あてはまる」8.5%、「まああてはまる」25.6%で合わせて34.1%と年々やや減少傾向にある。

「必修科目が多く、かえて自分のやりたいことができなかった」は増加傾向にある

Q11 東京大学の専門学部・学科等のカリキュラムについてお聞きします。

必修科目が多く、かえて自分のやりたいことができなかった

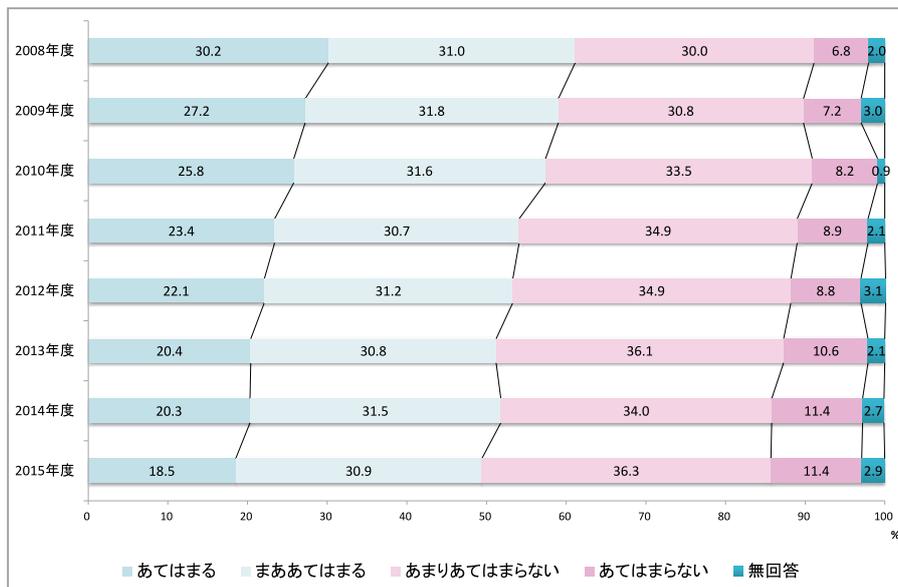


「必修科目が多く、かえて自分のやりたいことができなかった」は、2008年度は「あてはまる」8.8%と「まああてはまる」21.8%を合わせて30.6%であったが、2013年度まで37.1%と年々増加傾向にあった。2014年度には34.5%とやや減少したが、2015年度には38.8%と増加している。

「よく自分の専門以外の本を読んだ」者の割合は大幅に減少傾向

Q13 大学時代を通じての経験を総合して、次のようなことはどの程度あてはまりますか。

よく自分の専門以外の本を読んだ

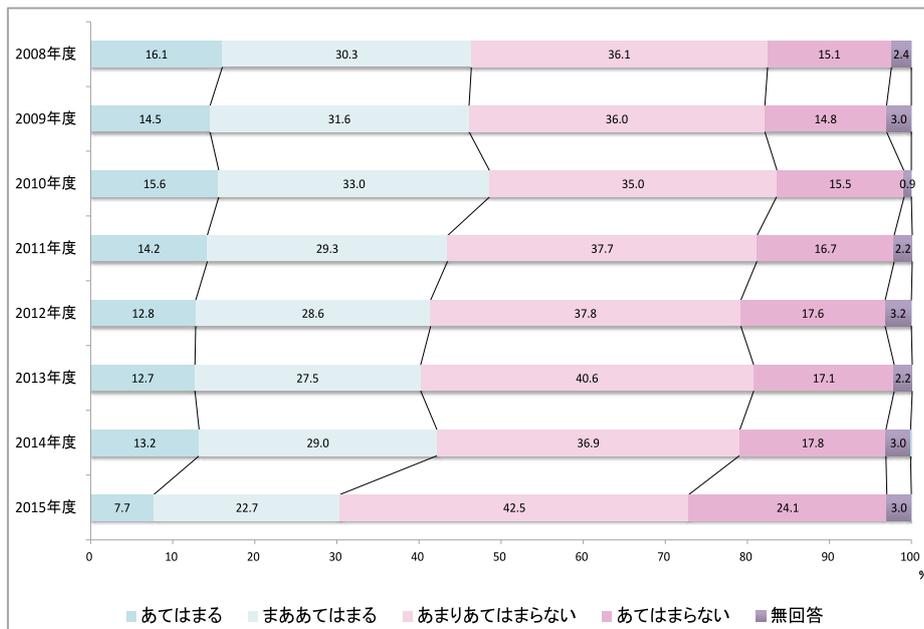


大学時代を通じての経験については、年度ごとに経験している者の割合が低下している項目が多い。「よく自分の専門以外の本を読んだ」者の割合は2008年度には「あてはまる」30.2%、「まああてはまる」31.0%で合わせて61.2%であったが年々減少し、2013年度には「あてはまる」20.4%、「まああてはまる」30.8%で、合わせて51.2%と、この間に10.0%

と大幅に低下している。2014年度は51.8%とわずかな増加をみせたものの、2015年度は「あてはまる」18.5%、「まああてはまる」30.9%で合わせて49.4%と、また減少している。

「社会評論や思想 / 自然科学の雑誌を読んだ」者も減少傾向

社会評論や思想 / 自然科学の雑誌を読んだ

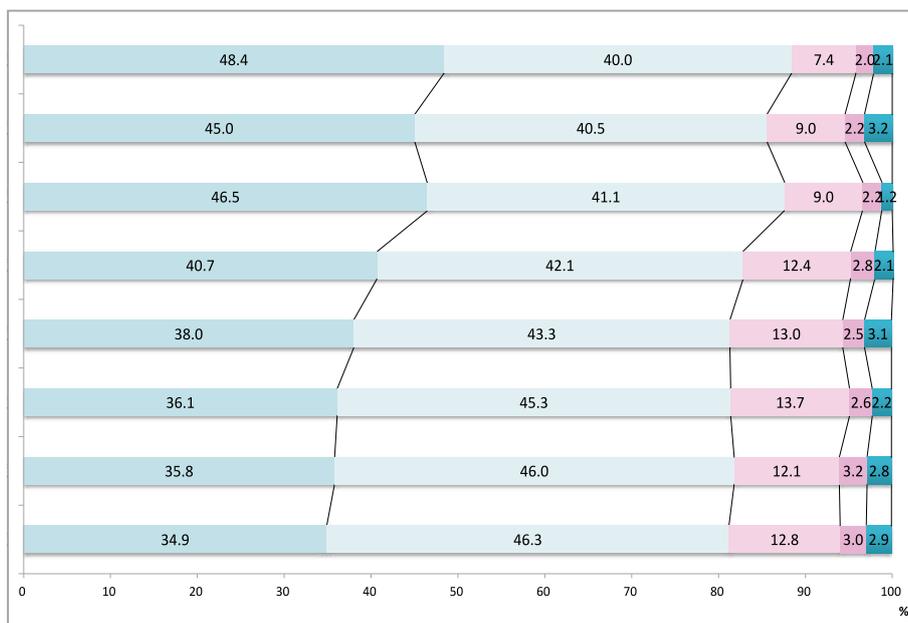


同じように、「社会評論や思想 / 自然科学の雑誌を読んだ」も、2008年度には「あてはまる」16.1%、「まああてはまる」30.3%で合わせて46.4%であったが、若干の増減はあるものの、年々減少し、2013年度には「あてはまる」12.7%、「まああてはまる」27.5%で、合わせて40.2%と、6.2%低下していた。しかし、2014年度は合わせて42.2%とやや増加して

いる。なお、2015年度は質問文を「学術雑誌をよく読んだ」に変更したため、厳密には比較できないが30.4%と減少している。

「議論したり考えたりする友達を得られた」者の割合も減少傾向

議論したり考えたりする友達を得られた

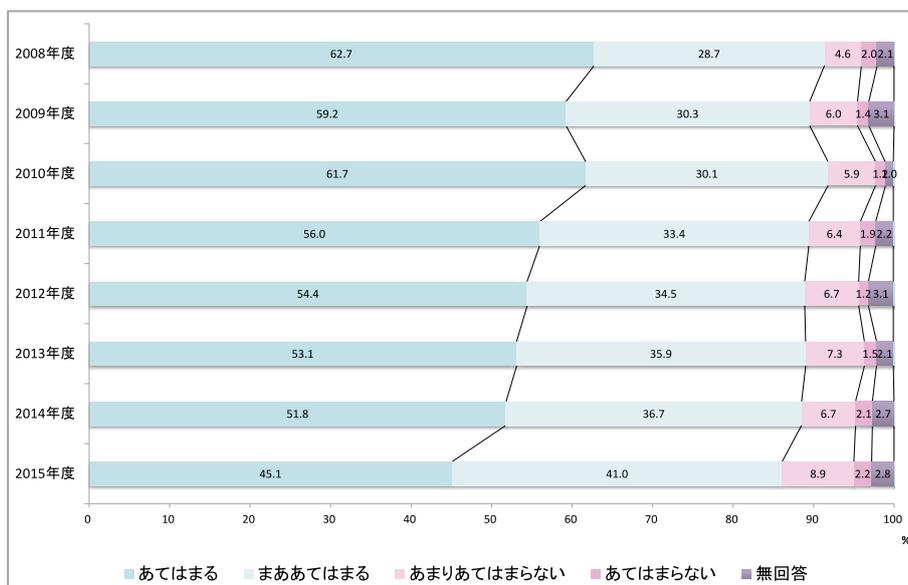


「議論したり考えたりする友達を得られた」者の割合は、2008年度には「あてはまる」48.4%、「まああてはまる」40.0%で合わせて88.4%であったが、年度ごとに多少の増減はあるものの年々減少傾向にあり、2015年度には「あてはまる」34.9%、「まああてはまる」46.3%で、合わせて81.2%と、この間約7%低下している。なお、2015年度は「議論したり、ともに考えたり

する友達を得られた」と質問文を一部変更しているため、比較には注意が必要である。

「優れた友人に感心したり感化されたりした」者の割合も減少傾向

優れた友人に感心したり感化されたりした



「優れた友人に感心したり感化されたりした」者の割合もやや低下している。2008年度には「あてはまる」62.7%、「まああてはまる」28.7%で合わせて91.4%であった。年度ごとにわずかな増減はあるが、傾向として年々減少し、2014年度には「あてはまる」51.8%、「まああてはまる」36.7%で、合わせて88.5%であったが、2015年度は86.1%と

さらに減少している。とりわけ、「あてはまる」者のみの割合では、2008年度の62.7%から2015年度の45.1%と17.6%の大幅減少となっている。なお、2015年度には、「優れた友人に感化された」と質問文を一部変更しているため、比較には注意が必要である。

「自分なりのものの考え方を得られた」者もわずかに減少傾向

自分なりのものの考え方を得られた

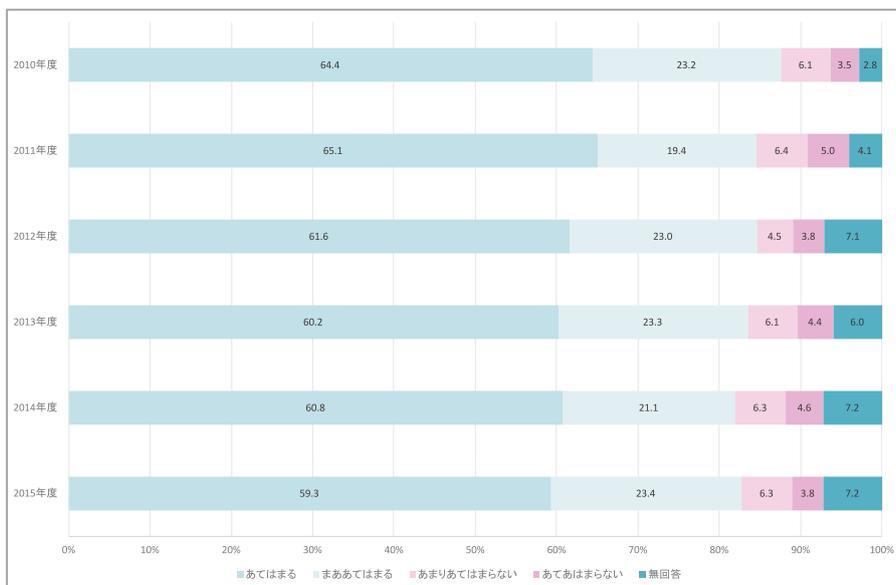


同じように、「自分なりのものの考え方を得られた」者の割合もやや低下している。2008年度には「あてはまる」32.1%、「まああてはまる」56.7%で合わせて88.8%であった。年度ごとにわずかな増減はあるが、やや減少傾向にあり、2015年度には「あてはまる」29.2%、「まああてはまる」も55.2%と、合わせて84.4%と減少している。

「進学先を希望通りに決めることができた」者はやや減少

Q25 進学振分けや進学先についてお聞きします。

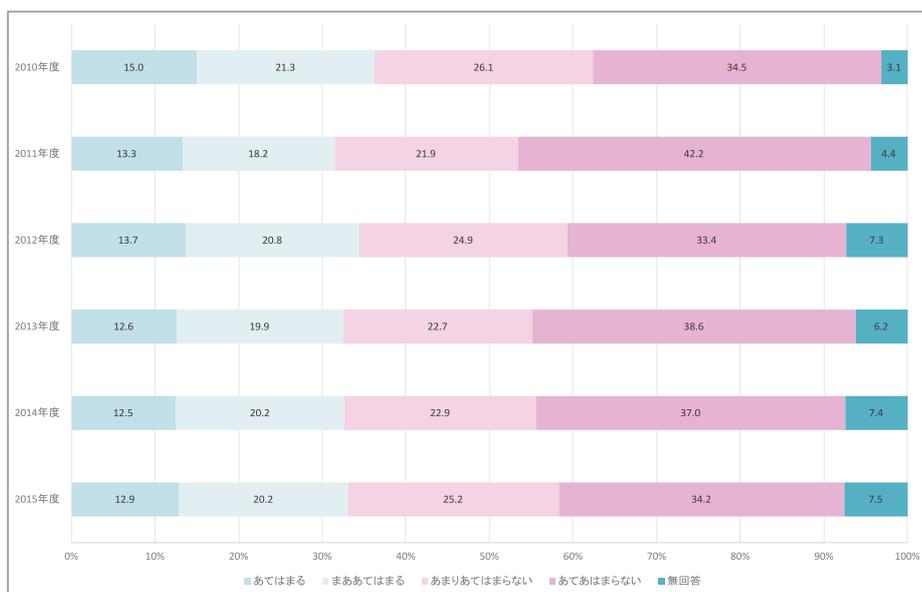
進学先を希望通りに決めることができた



「進学先を希望通りに決めることができた」者は、2010年度は「あてはまる」64.4%、「まああてはまる」23.2%で合わせて87.6%であったが、わずかであるものの、年々減少傾向にある。2015年度には「あてはまる」59.3%、「まああてはまる」23.4%で合わせて82.7%と減少している。特に「あてはまる」は2010年度の64.4%から減少傾向にあり、2015年度には59.3%と約5%減少している。

「途中で興味が変わって進学希望を考え直した」者はわずかに増減

途中で興味が変わって進学希望を考え直した



「途中で興味が変わって進学希望を考え直した」者は、2010年度は「あてはまる」15.0%、「まああてはまる」21.3%で合わせて36.3%であったが、年度ごと増減があり、2015年度には「あてはまる」12.9%、「まああてはまる」20.2%で合わせて33.1%とやや増加している。

「現在の進振り制度は複雑すぎる」と考える者はやや減少

現在の進振り制度は複雑すぎる



「現在の進振り制度は複雑すぎる」と考える者は、2011年度は「あてはまる」11.7%、「まああてはまる」27.4%で合わせて39.1%であったが、年々わずかに減少傾向にあり、2015年度には「あてはまる」10.0%、「まああてはまる」24.7%で合わせて34.7%と、やや減少している。

「進学先はイメージしていた通りだった」者は年度ごとに増減している

進学先は進学前にイメージしていた通りだった

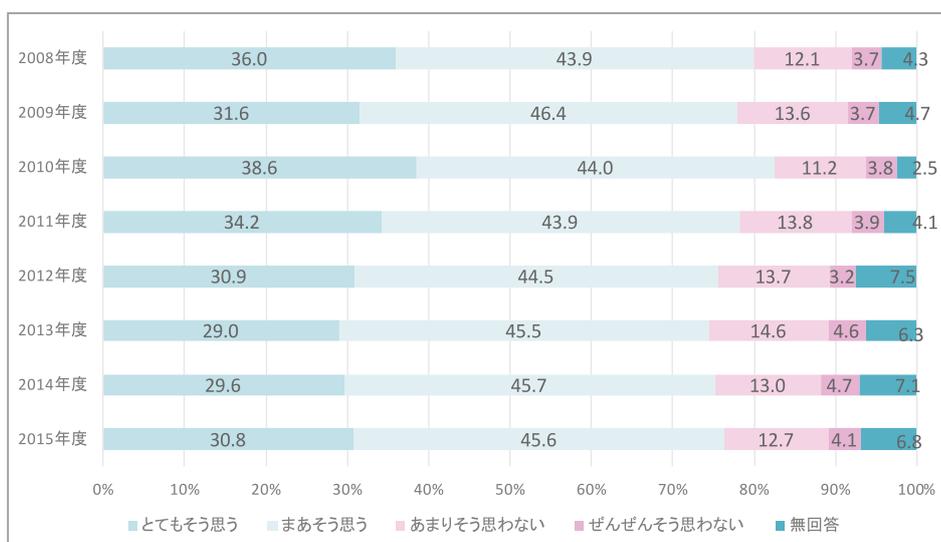


「進学先は進学前にイメージしていた通りだった」者は、2010年度は「あてはまる」23.7%、「まああてはまる」44.7%で合わせて68.4%であったが、年度ごとに増減があり、2013年度には「あてはまる」24.3%、「まああてはまる」39.6%で合わせて63.9%とやや減少傾向にあった。2015年度はそれぞれ25.7%と39.3%で、合わせて65.0%となっている。

「前期課程でいろいろ広く学んで、後期課程で専門を深める」現行方式の支持はやや減少傾向にあったが、2014年度と2015年度はわずかに増加

Q26 専門と教養の学習の仕方についていくつかの考え方があります。つぎの項目についてあなたはどのように考えていますか。

前期課程でいろいろ広く学んで、後期課程で専門を深めるやり方がよい

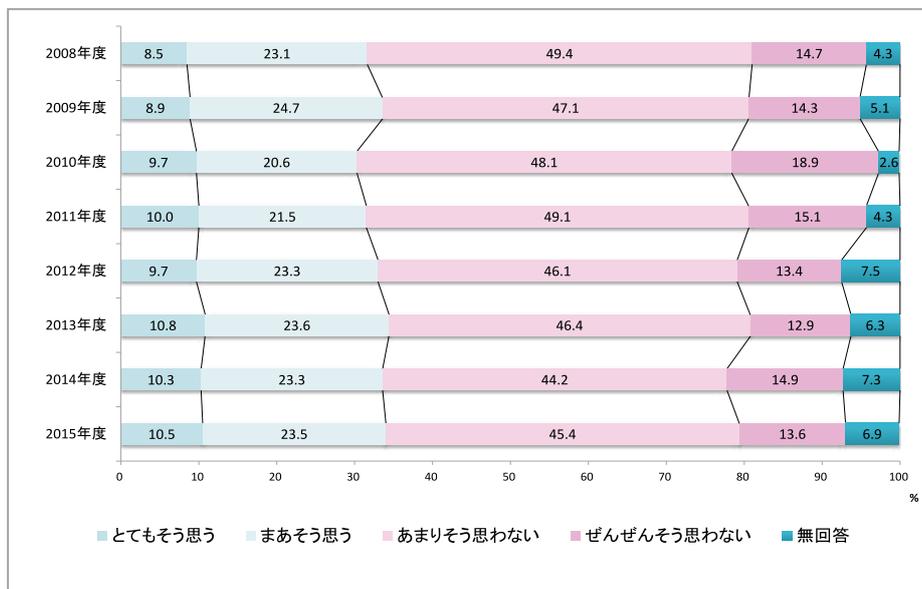


「前期課程でいろいろ広く学んで、後期課程で専門を深めるやり方がよい」については、2008年度は「とてもそう思う」36.0%、「まあそう思う」43.9%で合わせて79.9%であったが、2010年度の82.6%をピークに減少し、2013年度には合わせて74.5%とやや減少傾向にあった。しかし、

2014年度は75.3%、2015年度は76.4%と、わずかではあるが増加している。

「入学時点から専門を決めて、それを4年間で学んでいく」方式の支持はやや増加傾向

入学時点から専門を決めて、それを4年間で学んでいくやり方がよい



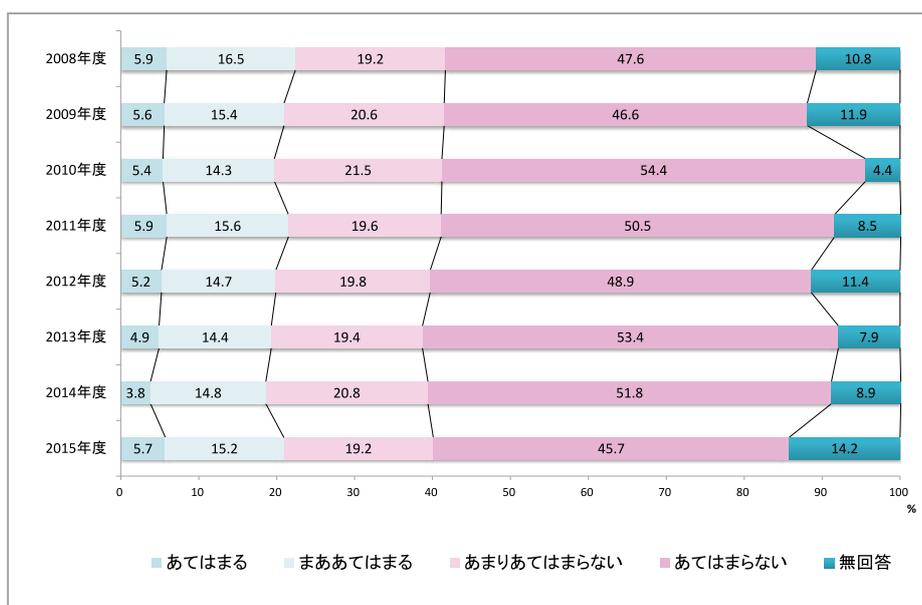
これに対して、「入学時点から専門を決めて、それを4年間で学んでいくやり方がよい」については、2008年度は「とてもそう思う」8.5%、「まあそう思う」23.1%で合わせて31.6%であったが、2010年度にやや減少したものの、その後増加傾向にあり、2015年度は合わせて34.0%となっている。

進路については、肯定的な傾向も否定的傾向も見られる

「就職活動のために勉強の時間が取れなかった」者は、年度ごとにわずか増減

Q28 あなたの卒業後の進路とその決定プロセスについてお聞きします。次のようなことは、どの程度あてはまりますか。

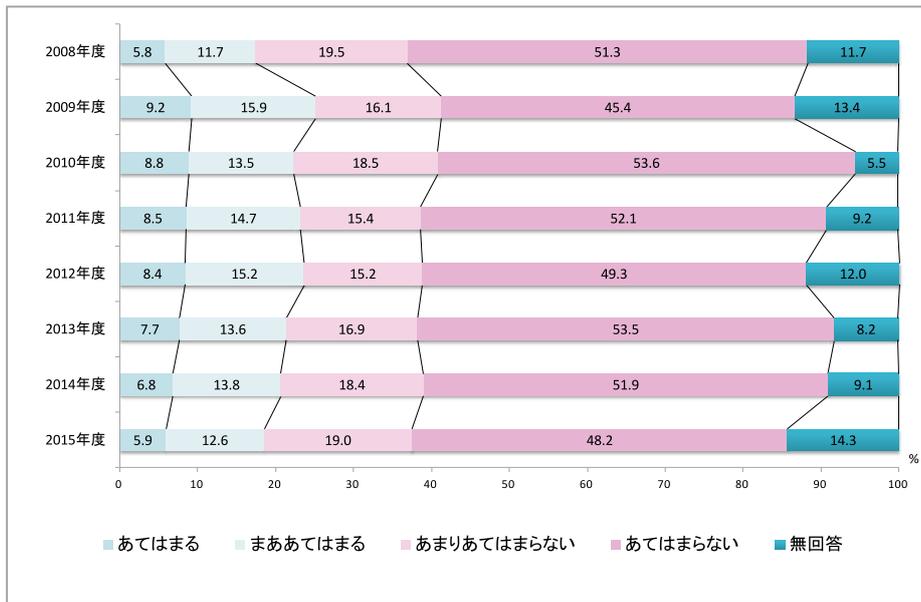
就職活動のために勉強の時間が取れなかった



「就職活動のために勉強の時間がとれなかった」者の割合は、2008年度は「あてはまる」5.9%、「まああてはまる」16.5%で合わせて22.4%であったが、やや年毎の増減はあるものの、2015年度には合わせて20.9%となり、2014年度の18.6%と比べ、わずかに増加している。

「厳しい就職活動となった」者はやや減少傾向

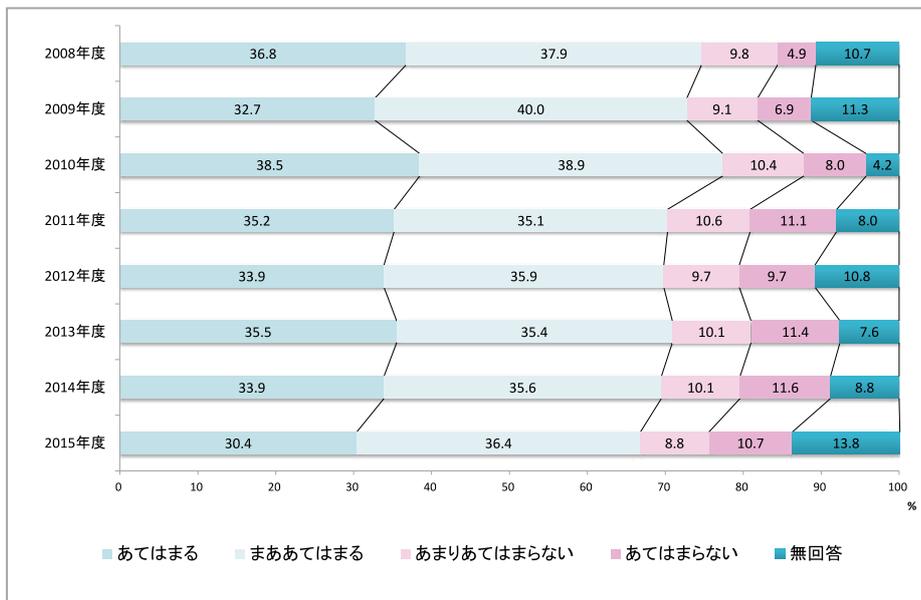
厳しい就職活動となった



「厳しい就職活動となった」者の割合は、2008年度は「あてはまる」5.8%、「まああてはまる」11.7%で合わせて17.5%であったものが、2009年度には25.1%と増加している。その後、わずかに増減しているが、減少傾向にあり、2015年度には18.5%となっている。

「満足のいく進路決定ができた」者はやや減少傾向

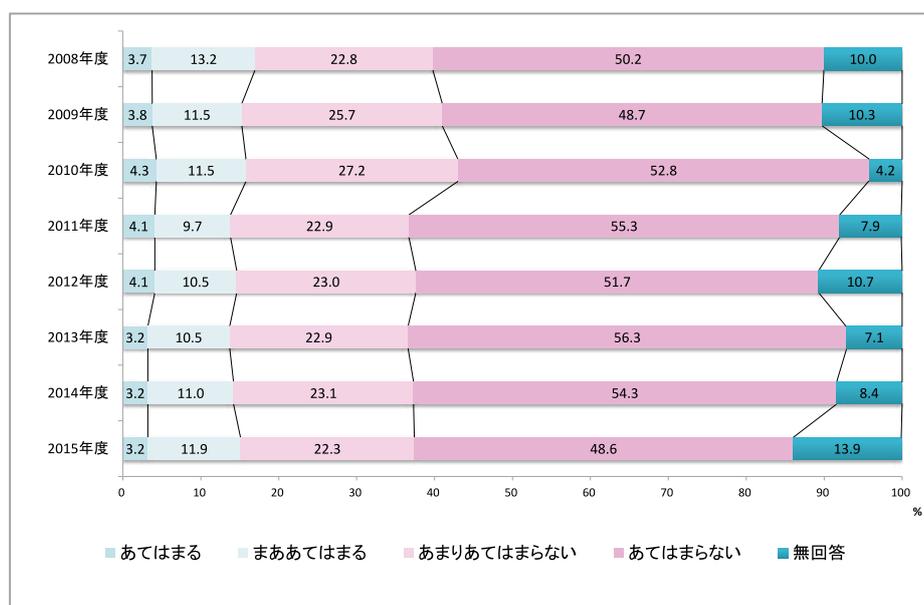
満足のいく進路決定ができた



「満足のいく進路決定ができた」者の割合は、2008年度は「あてはまる」36.8%、「まああてはまる」37.9%で合わせて74.7%であったが、2010年度の77.4%をピークに減少し、2015年度には合わせて66.8%と減少傾向にある。

「大学の進路相談の機会が役に立った」者はやや減少傾向だが、2015年度はやや増加

大学の進路相談の機会が役に立った



「大学の進路相談の機会が役に立った」者の割合は、2008年度は「あてはまる」3.7%、「まああてはまる」13.2%で合わせて16.9%であった。その後、年度ごとに増減はあるが、減少傾向にあり、2013年度には13.7%となっていた。2014年度は14.2%、2015年度は15.1%と、わずかであるが増加している。

ほとんどの場合、増加や減少の割合は小さいが、年度ごとに減少あるいは増加の傾向が明確にみられるものも多い。しかし、この傾向が続くのか、またいかなる要因によるかについては、引き続き検討が必要である。

大学教育の達成度調査(2008年度-2015年度)学部別回収率

2016年6月1日現在

		法学部	医学部	工学部	文学部	理学部	農学部	経済学部	教養学部(後期課程)	教育学部	薬学部	合計
2008年度	卒業生数	433	133	907	336	305	279	349	165	96	90	3,093
	回収枚数	152	23	93	42	225	258	275	35	40	84	1,227
	回収率	35.1	17.3	10.3	12.5	73.8	92.5	78.8	21.2	41.7	93.3	39.7
2009年度	卒業生数	409	129	925	291	277	272	359	141	102	78	2,983
	回収枚数	156	19	437	263	202	247	330	25	29	73	1,781
	回収率	38.1	14.7	47.2	90.4	72.9	90.8	91.9	17.7	28.4	93.6	59.7
2010年度	卒業生数	398	109	943	370	293	267	358	184	101	78	3,101
	回収枚数	32	20	681	265	228	245	349	21	20	75	1,936
	回収率	8.0	18.3	72.2	71.6	77.8	91.8	97.5	11.4	19.8	96.2	62.4
2011年度	卒業生数	425	121	978	352	318	279	333	154	110	91	3,161
	回収枚数	407	18	631	272	240	257	304	144	105	90	2,468
	回収率	95.8	14.9	64.5	77.3	75.5	92.1	91.3	93.5	95.5	98.9	78.1
2012年度	卒業生数	407	124	950	360	282	266	329	186	99	86	3,089
	回収枚数	395	112	630	303	239	233	287	148	96	81	2,524
	回収率	97.1	90.3	66.3	84.2	84.8	87.6	87.2	79.6	97.0	94.2	81.7
2013年度	卒業生数	427	124	967	361	282	267	334	186	99	86	3,133
	回収枚数	387	121	669	294	203	234	292	158	99	80	2,537
	回収率	90.6	97.6	69.2	81.4	72.0	87.6	87.4	84.9	100.0	93.0	81.0
2014年度	卒業生数	399	126	974	372	301	275	365	175	90	82	3,159
	回収枚数	389	113	610	318	228	241	284	156	75	80	2,494
	回収率	97.5	89.7	62.6	85.5	75.7	87.6	77.8	89.1	83.3	97.6	78.9
2015年度	卒業生数	392	131	958	311	292	269	325	171	99	89	3,037
	回収枚数	365	124	639	273	206	243	250	143	98	86	2,427
	回収率	93.1	94.7	66.7	87.8	70.5	90.3	76.9	83.6	99.0	96.6	79.9

大学総合教育研究センター ホームページ : <http://www.he.u-tokyo.ac.jp/>
 問い合わせ : 大学改革基礎調査部門 担当 : 小林・王 (内線 : 22016) まで





この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報室の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報室までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、大学総合教育研究センターを通じて行ってください。

東京大学広報室

no. 1493 2017年3月17日

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学大学総合教育研究センター
大学改革基礎調査部門
e-mail : enq@he.u-tokyo.ac.jp